

第 1 章 向日市の歴史的風致形成の背景

第 1 節 自然と風土（地理的環境、気象）

1 地理的環境

本市は、大阪湾から淀川をさかのぼり、山崎の戦いで名高い天下分け目の天王山と日本三大八幡宮の一社である石清水八幡宮の所在する男山と狭隘な地形を通り、桂川・宇治川・木津川に分岐した、京都盆地の南西部に位置する。

西方には小塩山^{おしおやま}をはじめとする京都西山連峰を望み、東方には桂川が流れる。市の北部と西部は、京都市西京区、東部は京都市南区、伏見区と三方を京都市に、南部は長岡京市に接し、大山崎町を経て大阪府に至る。

市域は東西約 2 km、南北約 4 km で、面積は 7.72k m² を測り、全国の市では蕨市、狛江市に次いで三番目に狭い。

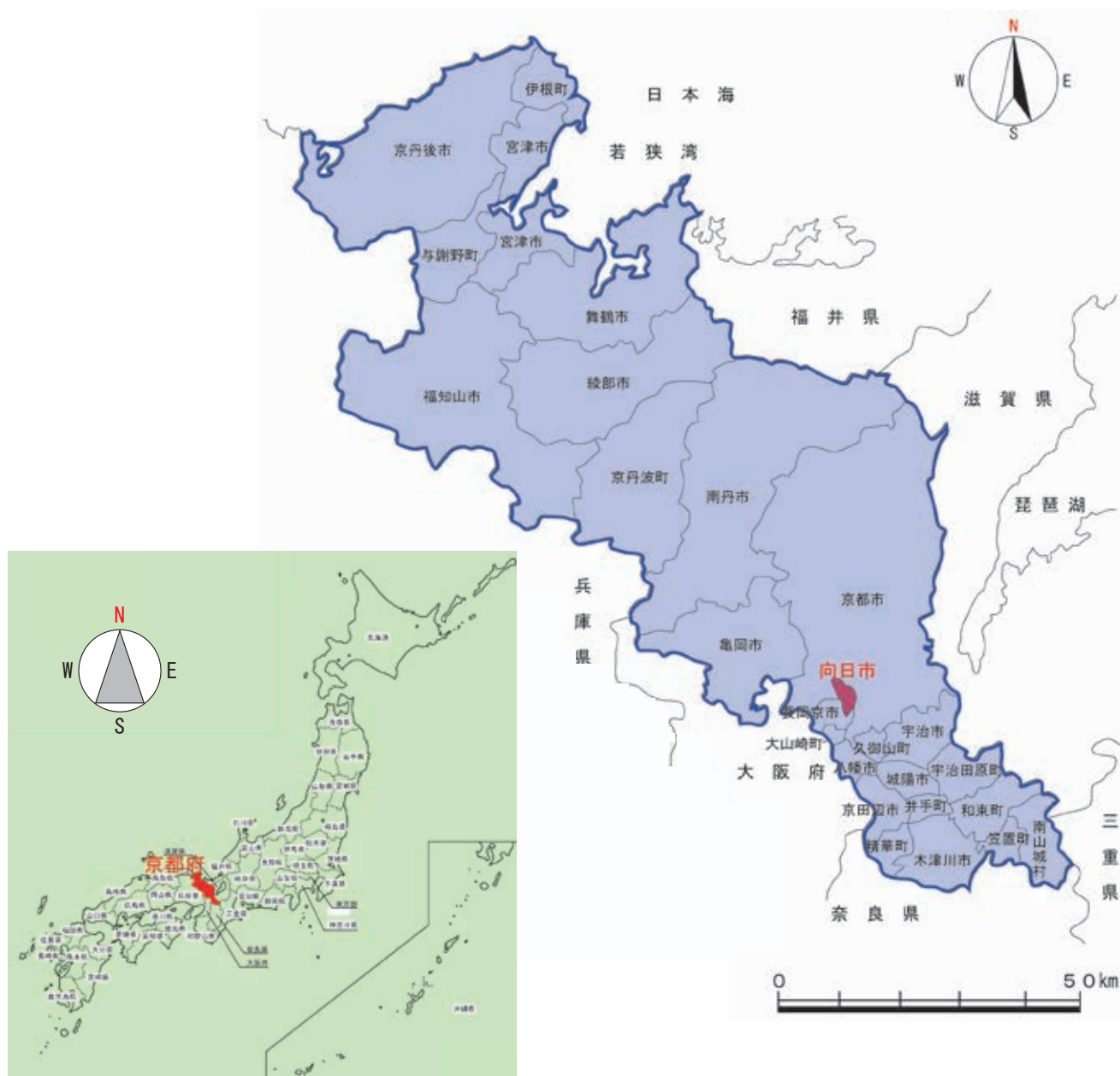


図 1-1-1-1 向日市の位置

地勢は、全般に北西方向が高地に南西方向が低地となる平坦な地形である。このため、市域は、数百万年前から数十万年前に堆積したと考えられる大阪層群により形成された西部の丘陵地と中央部の段丘地、桂川と小畑川によって形成された東部の沖積平野に三分することができる。

西部一帯には、標高 35m から 80m の京都嵐山から続く丘陵が南北に細長く横たわり、丘陵の全域には竹林が広がり多くのタケノコが産出される。この丘陵頂部には、古墳が点在し、丘陵突端部には、「向日神社」が所在し、本市の名称の由来となっている。

中央部一帯には、丘陵部を縁取るように展開した標高 15m から 30m の低位段丘が広がる。この中央部には、かつての都である「長岡宮」が造営され、廃都後も地域の主要な居住地をなしてきた。東部一帯には、標高 12m 前後の条里制水田が広がる。

表 1-1-1-1 向日市の地勢

面	積	7.72km ²
地 勢	位 置	東経 135 度 42 分 3 秒、北緯 34 度 56 分 44 秒
	広 ぼう	東西約 2.0 km、南北約 4.3 km
	海 抜	最高 100.5 m、最低 13.7 m



写真 1-1-1-1 向日市の航空写真（三川合流部から、京都市方面（北東）を望む）



写真 1-1-1-2 向日市の航空写真（京都市方面（北）を望む）

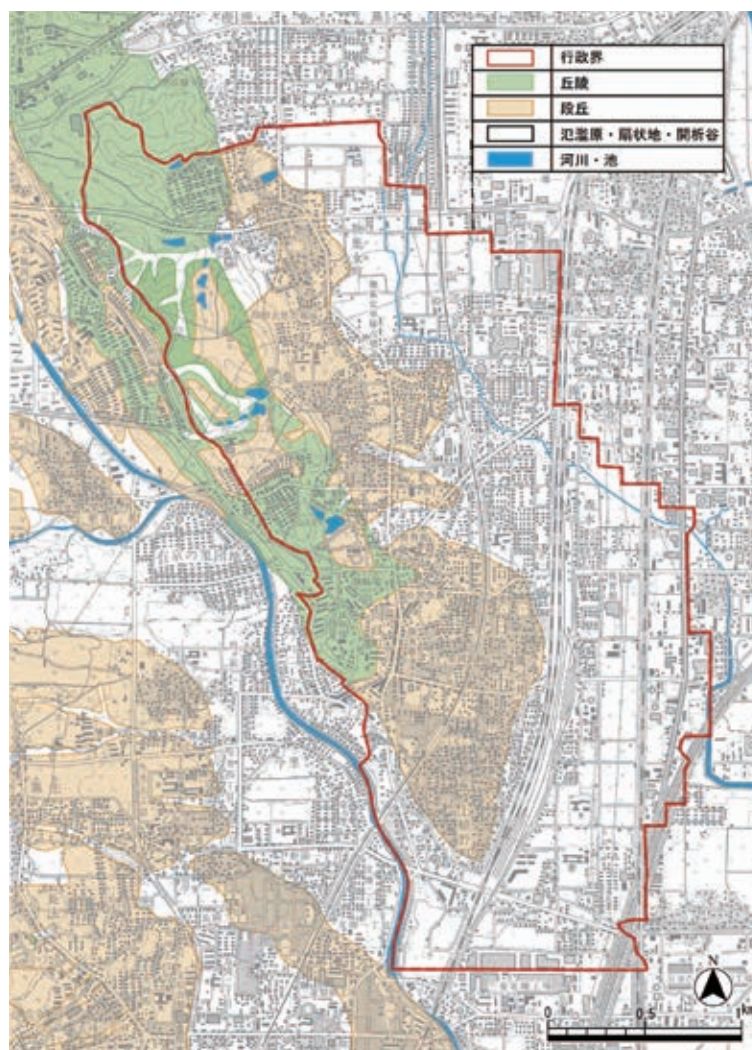


図 1-1-1-2 向日市の地形図

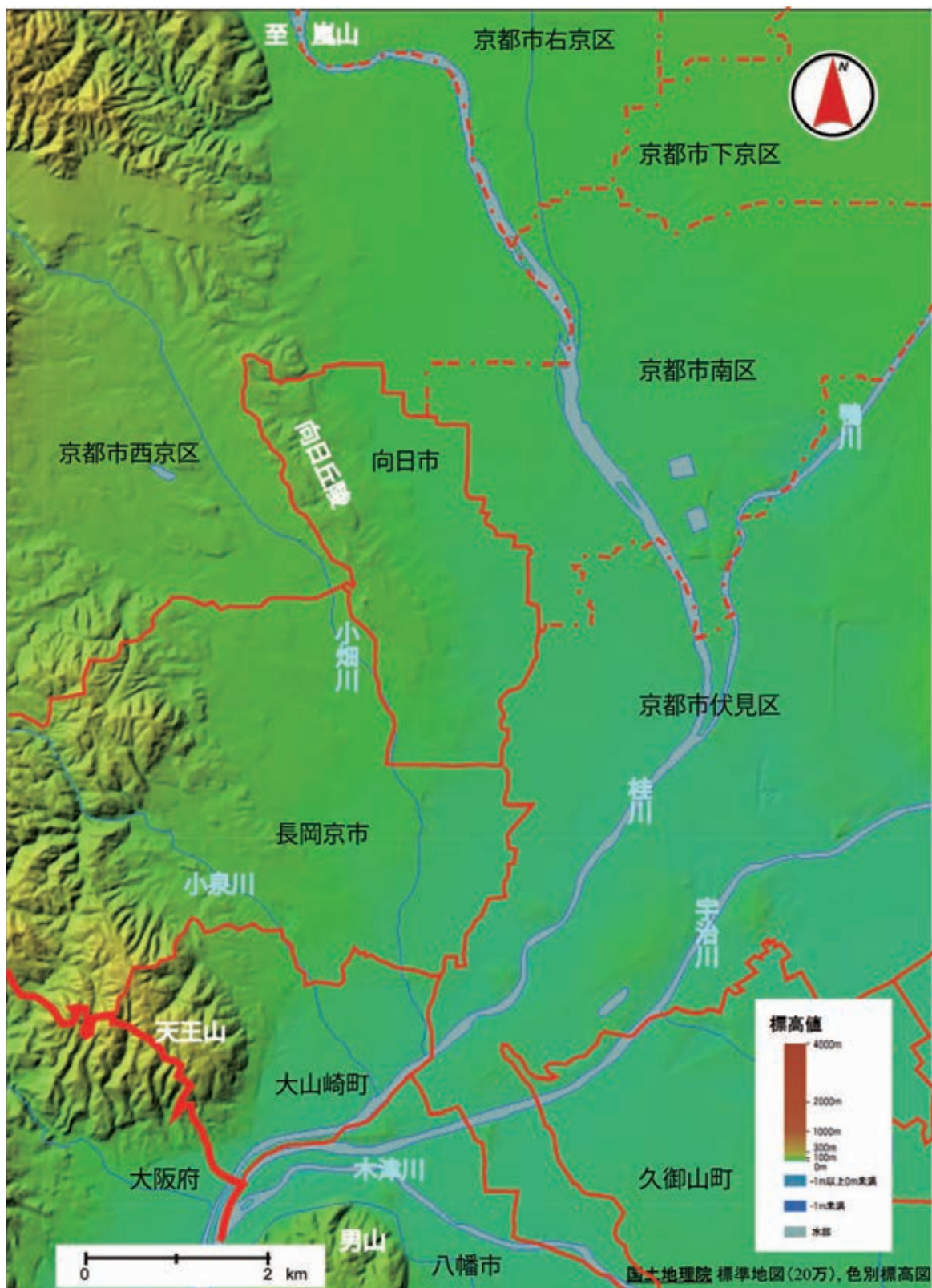


図 1-1-1-3 向日市および周辺の標高

2 気象

本市は、瀬戸内海式（太平洋）気候と内陸性気候の特性を併せ持つ、四季の移ろいが明瞭な土地柄である。平成10年～24年（1998～2012）の年間平均気温は、15.6～18.8℃で推移し、概ね温和で、隣接する京都市内の盆地気候に比べて幾分か過ごしやすいが、「図1-1-2-1 平成24年（2012）月別気温の推移」が示すとおり、盆地特有の夏の蒸し暑さや冬の底冷えを感じる年較差が大きいのが特徴である。

平成24年（2012）の降水量は、6月が217.5mmと最も多く、年間降水量は1,401mmとなっている。また、「図1-1-2-2 年間降水量の推移」が示すとおり、日本の平均降水量（1,718mm）より概ね低い。これは古墳時代に築造された灌漑用水路が、現在も水田を潤す一因ともなっている。

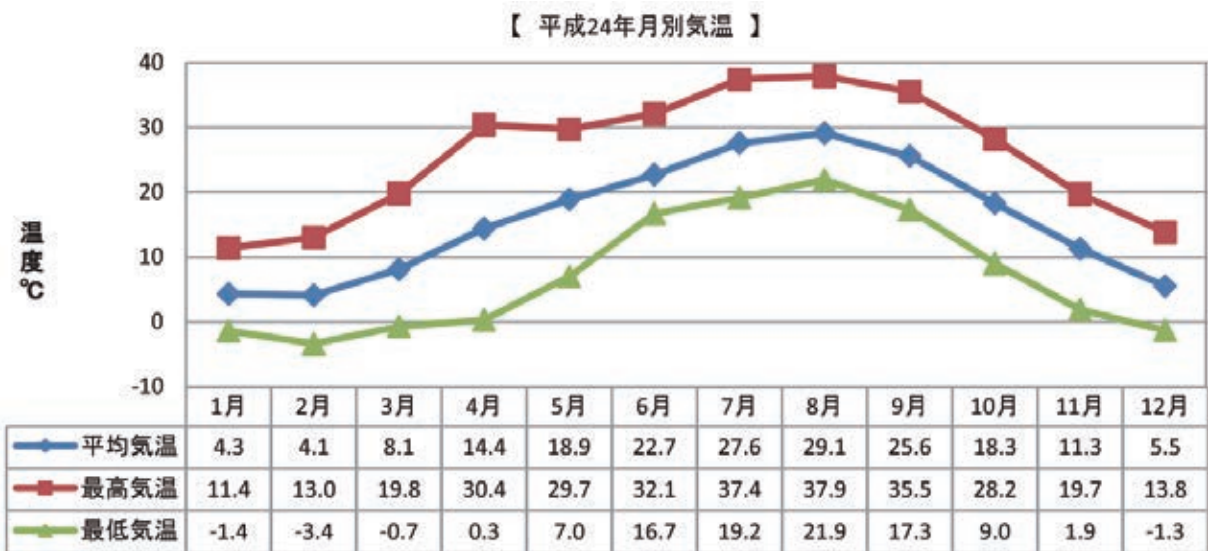


図1-1-2-1 平成24年（2012）月別気温の推移

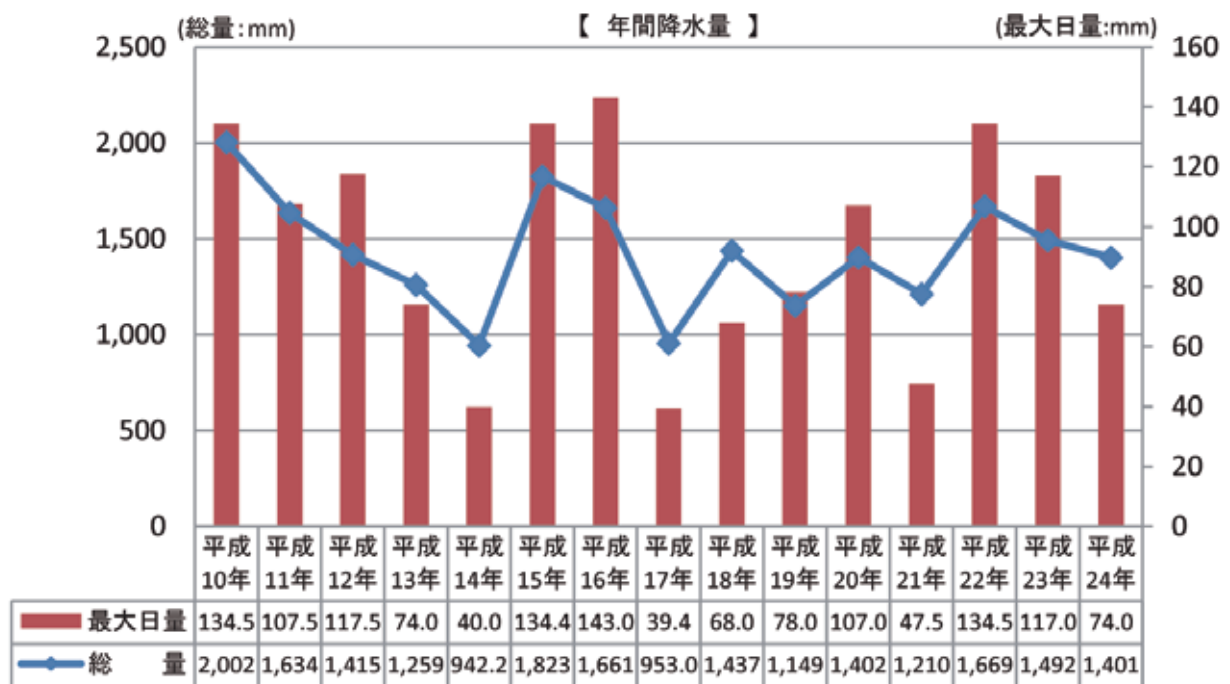


図1-1-2-2 年間降水量の推移

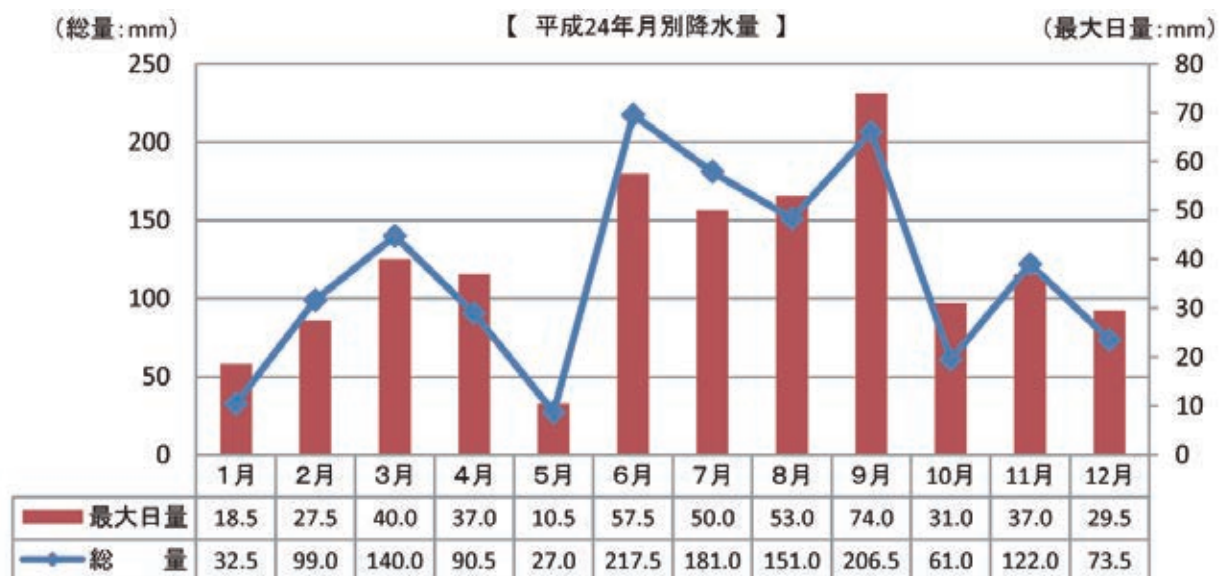


図 1-1-2-3 平成 24 年 (2012) 月別降水量の推移

第2節 社会環境（人口、交通、産業、観光）

1 まちの形成

向日市域は、東西に約2km、南北に約4km、面積7.72km²の西日本一コンパクトな「市」である。

明治以前の向日市域は、江戸時代の初頭に形成された町場である「向日町」と物集女、寺戸、^{かい}鶏冠井、上植野、西土川、白井の6か村からなり、宮家や公家、社寺の領地が錯綜した地域であった。

古くから、^{あた}愛宕、^{かど}葛野、^{おとくに}乙訓、^{きい}紀伊、^う宇治、^く久世、^{つづき}綴喜、^{そうらく}相楽の8郡に分かれていた山城国は、明治元年（1868）4月に成立した京都府の管轄下に入り、明治12年（1879）に京都府の出先機関である郡役所が設置された。本市を含む乙訓郡役所は、「向日町」に設置された。

現在の市域の範囲は、明治5年（1872）の区戸長制が採用時に乙訓郡第一区となり、明治11年（1878）の郡区町村編成法時代や連合戸長役場時代の範囲、明治22年（1889）の町村制施行に伴う範囲が、そのまま変更されることなく「向日町」として新町に移行した。

その後、市制町村制などに基づく合併や再編が全国的に推進される中、区域変更が一度も行われることなく、昭和47年（1972）の市制施行に伴い「向日市」として引き継がれ、現在に至る極めて希な事例である。

2 人口・世帯数

人口・世帯数は平成26年（2014）6月1日現在で53,602人、21,643世帯を擁し、人口密度は6,984.62人/km²で府内市町村の中で最も高い。

人口は、市町村制が開始された明治22年（1889）には4,178人であったが、昭和30年代後半から昭和50年代、特に昭和40年代前半をピークとして急増した。これは、本市が京都・大阪都市圏への交通が至便なことから、大都市近郊住宅都市として急速に開発が進んだためである。

人口の推移は、昭和29年（1954）に1万人を、昭和43年（1968）に3万人を、昭和53年（1978）に5万人を、平成17年（2005）に5万5千人を超えたが、その後は若干減少し、ここ10年ほどは一時期ほどの住宅などの開発が見られなかったため、5万4千人前後で安定し、都市としての成熟期を迎えつつある。しかし、市北部において、平成9年（1997）から民間の個人施行による土地区画整理事業10.5haが、平成21年（2009）から地権者による組合施行の土地区画整理事業8.4haが、隣接して実施された。これにより、再び人口の増加や流入に変化が表れるものと考えられる。

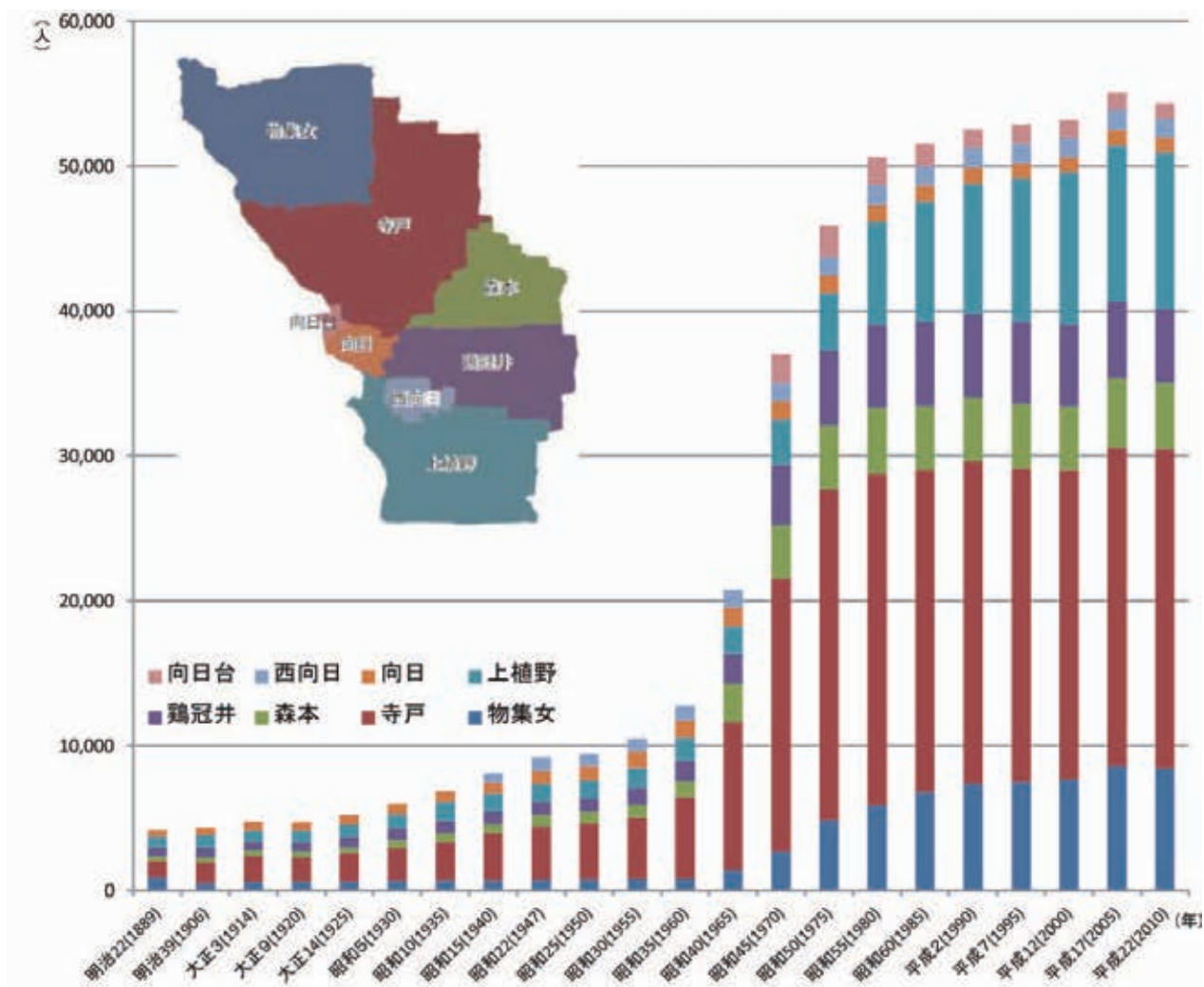


図 1-2-2-1 行政区（大字）別人口の推移（出典 国勢調査など）

- 備考 ① 本表では、物集女、寺戸、森本、鷄冠井、向日、上植野の6つの大字に加え、西向日、向日台の2自治区の人口表記した。
- ② 西向日は、昭和の初頭に区画整理のもとに開発された地域で、地域として成熟を迎えたため昭和 15 年 (1940) から上植野から独立した行政区として表に算入している。
- ③ 向日台は、昭和 36 年 (1961) に向日丘陵を名神高速道路の土取場として掘削された地に、昭和 42 年 (1967) に府営向日台団地として完成し、昭和 45 年 (1970) から向日から独立した行政区として表に算入している。現在は、約 500 世帯が居住する。

一方、世帯数は、増加を続けており、昭和 45 年（1970）に 1 万世帯を、平成 15 年（2003）に 2 万世帯を超え、現在、一世帯あたりの人数は 2.47 人で核家族化が進行している。

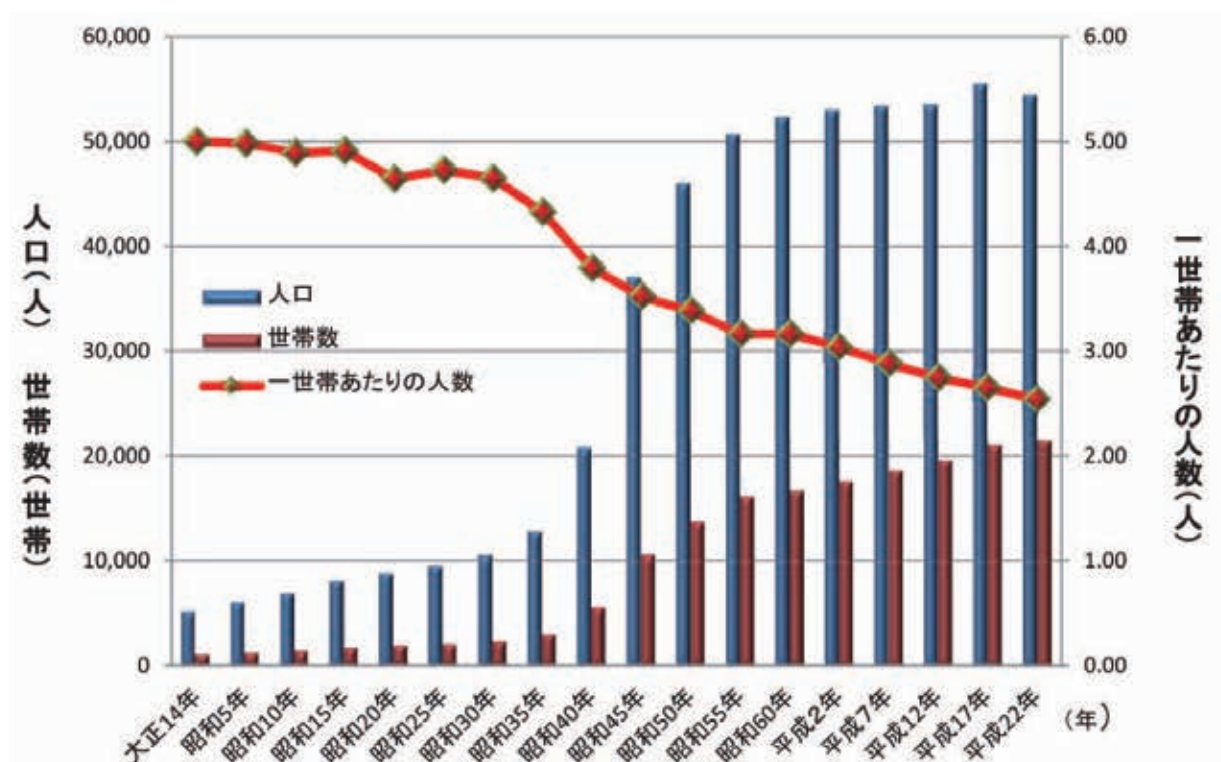


図 1-2-2-2 人口・世帯数・一世帯あたりの人数の推移（出典 国勢調査）

平成 25 年（2003）10 月現在の年齢別の構成比は、年少人口（15 歳未満）が 7,627 人で 14.05%、生産年齢人口（15 ～ 64 歳）が 33,351 人で 61.42%、65 歳以上人口が 13,320 人で 24.53%で、少子高齢化もみられるものの、全国平均や京都府平均と比較して、年少人口が多く、比較的若い世代が多いといえる。

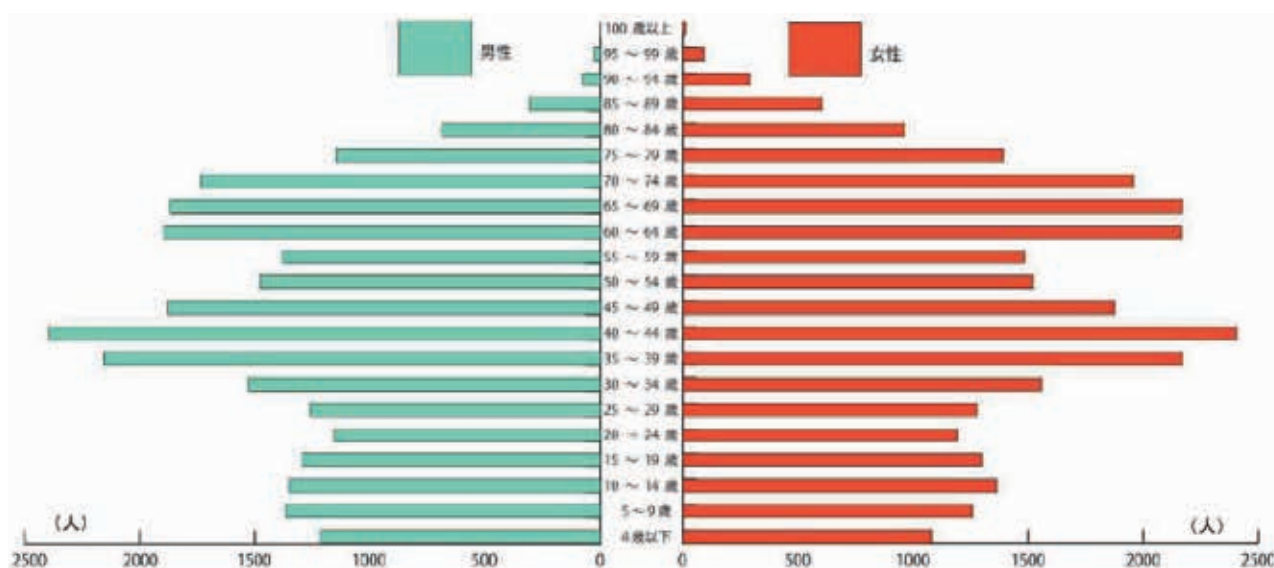


図 1-2-2-3 平成 25 年 年齢（各歳）別・男女別人口（出典 向日市統計書）

これは、本市が京都、大阪の大都市の通勤型近郊都市として、子育て世代が多いことの表れである。

平成 23 年 (2011) 10 月 1 日現在の昼間人口は、78.29%と住宅都市の特徴が顕著に表れ、流出人口 (21,503 人) の約 6 割 (12,933 人) を京都市内が占めている。市内には就職先となる企業が少なく、就学・就業年齢層は市外へと通学、通勤し、高齢層が市内に残る現象がみられる。

また、市域の 8 割弱にあたる 5.93 km²が人口集中地区 (D I D) となっており、総人口の 99.6%が D I D に集中し、地区内の人口密度は 9,121 人 / km² (平成 22 年 (2010) 10 月 1 日現在) と高い数値を示している。

人口動態は、小規模ながら人口の流出入がほぼ同数である。

産業人口は、平成 22 年 (2010) 10 月 1 日現在 25,312 人で、第 1 次産業が 273 人 (1.11%)、第 2 次産業が 6,355 人 (25.78%)、第 3 次産業が 16,888 人 (68.52%) となっている。

3 土地利用

現況の土地利用は、昭和 30 年代後半から顕著となった住宅都市化により市域の大半は市街化されている。

公用地、道路敷、鉄道敷などを除いた課税対象の地目別面積をみると、約半数にあたる 2.73 km²が宅地、約 3 割にあたる 1.66 km²が農地で、山林は 0.24 km²と 4 %程度である。

宅地は、市域の中央部の低位段丘面に南北に広く分布する。

農地は、丘陵部の竹林と沖積地 (平野部) の水田に二分される。西部の丘陵部には、モウソウチクの純林が占める、良質のタケノコ栽培が盛んに行われている。沖積地の水田は、市域の北端および南端と東部の J R 東海道本線、国道 171 号に挟まれた範囲で、長岡京廃都後に敷設された条里が明瞭に残る地域に南北に細長く分布している。

商業施設は、阪急東向日駅周辺と市中央部を南北に通る物集女街道 (主要地方道西京高槻線) 沿いに集中し、工場や流通関連事務所などが国道 171 号沿いに立地している。

市域全域が都市計画区域であり、うち約 7 割にあたる 521ha が市街化区域に指定されている。用途地域をみると、市街化区域の 74%が住居系であり、22%が工業系、4 %が商業系の用途となっている。

その他、西部の丘陵部一帯は、市街化調整区域、西国風致地区 (79.5ha)、宅地造成など規制区域 (200ha) に指定され、本市を代表する竹林景観や丘陵地形の保全と保護が図られている地域である。

また、近年、J R 桂川駅と阪急洛西口駅以南の両線に挟まれた北部地域において、前述した 2 つの土地区画整理事業にあわせ、阪急京都線の連続立体交差化事業が実施されている。

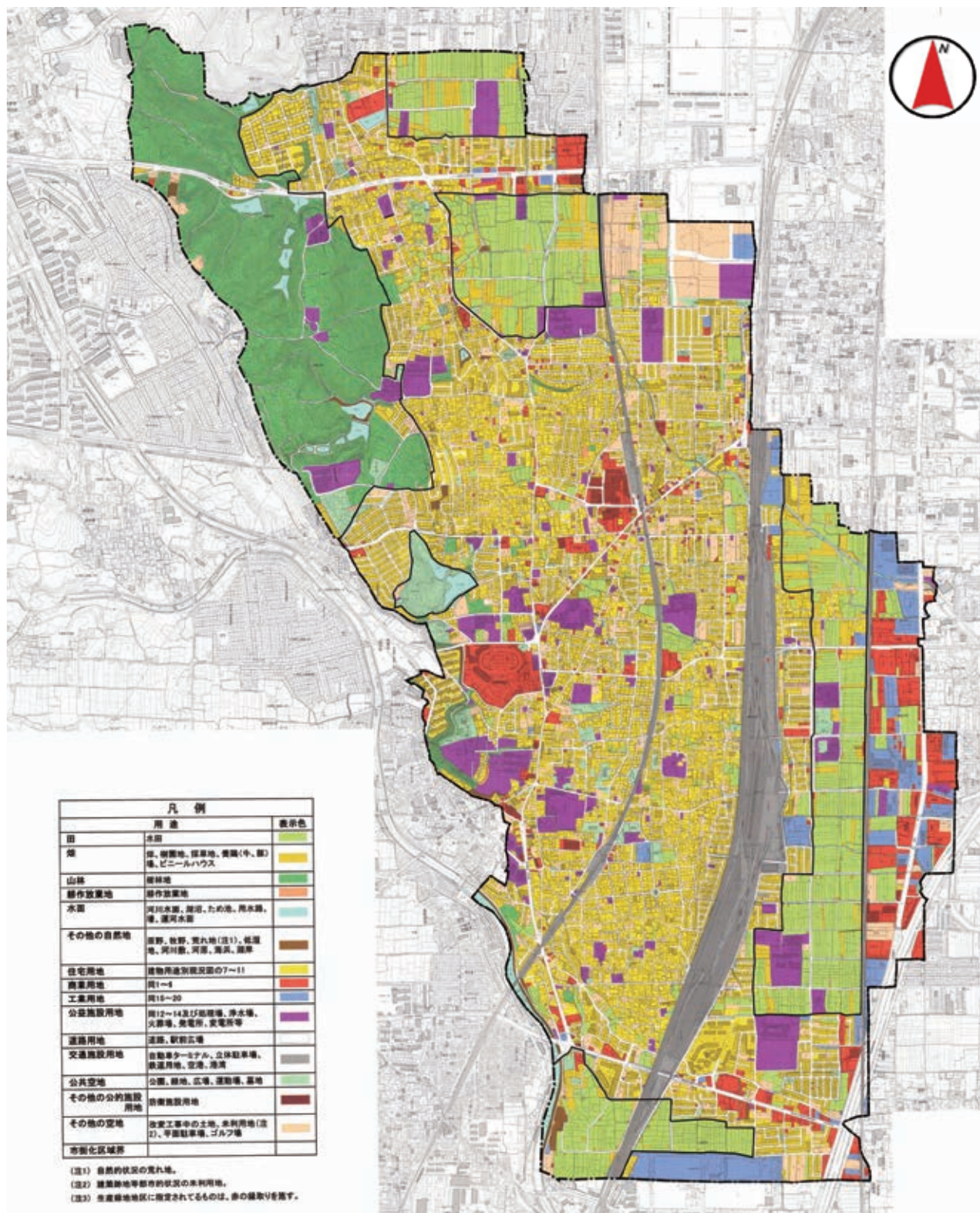


図 1-2-3-1 土地利用現況図

4 交通（道路・鉄道）

本市を含む地域は、古くから京阪間を結ぶ交通の要衝で、本市の所在する桂川（淀川）右岸にＪＲ東海道本線、東海道新幹線、阪急京都線、国道 171 号、名神高速道路が、左岸に京阪本線、旧国道 1 号（旧京街道）と、かつての水上交通路であった川筋を含めて近畿の大動脈が存在する。

向日市内を通る主な道路は、名神高速道路および国道 1 路線、府道 10 路線がある。市域の東端を縦貫する国道 171 号は京都－神戸間を結ぶ広域幹線道である。

国道 171 号とともに主な南北幹線道としての役割を持つ道に、古くは西国街道と山陰街道を結ぶバイパスとして利用されていた物集女街道（主要地方道西京高槻線）がある。これら南北道を結ぶ形で東西に府道中山稲荷線、府道上久世石見上里線、府道伏見向日線、府道志水西向日停車場線が横断している。その他ＪＲ向日町駅－阪急東向日駅－市中心部を結ぶ府道向日町停車場線などがある。

また、市域の約 3 km 南方には平成 15 年（2003）名神高速道路に京滋バイパスが接続し、大山崎ＪＣＴ・ＩＣが開設、平成 25 年（2013）４月に京都縦貫自動車道（大山崎ＪＣＴ・ＩＣ～沓掛ＩＣ）が開通し、飛躍的に利便性が向上した。

鉄道はＪＲ東海道本線、阪急京都線が市域を南北に縦断し、市域にはＪＲ 1 駅、阪急 2 駅があり、さらに北接する京都市との市境に、ＪＲ 1 駅、阪急 1 駅が所在し、合計 5 駅の利用が可能である。

5 その他都市施設など

①公園・緑地

本市における公園・緑地の設置状況は、都市公園 43 か所、その他公園 71 か所、合計 114 か所である。これら公園・緑地は、住宅地域内に配置されており 1 ha 以下の小規模で、面積は計 70,707 m²、1 人あたり公園面積 1.31 m²となっている。

平成 24 年（2012）3 月末の 1 人あたり公園面積は、全国平均の 11.3 m²、京都府内平均の 11.6 m²を大きく下回っている。

表 1-2-5-1 地域別公園数、面積

種別	数	面積（㎡）	向日市	地区名 （大字）	公園数	公園面積 （㎡）	地区別 人口（人）	1人当たり 公園面積（㎡／人）
都市公園	43	60,156		物 集 女 町	15	8,511	8,498	1.00
				寺 戸 町	55	26,671	22,203	1.20
				森 本 町	9	1,033	4,602	0.22
その他公園	71	10,551		鶏 冠 井 町	16	21,196	5,720	3.71
				上 植 野 町	15	4,269	11,762	0.36
合計	114	70,707		向 日 町	4	9,027	1,395	6.47
				計	114	70,707	54,180	1.31

表 1-2-5-2 公園数および面積の経過

年度	総数		都市公園		その他公園		人口 1 人当たり 公園面積	備考
	数	面積	数	面積	数	面積		
平成 20 年度	99	59,645 m ²	32	47,489 m ²	67	12,156 m ²	1.08 人 / m ²	
平成 21 年度	100	60,009 m ²	32	47,489 m ²	68	12,520 m ²	1.10 人 / m ²	
平成 22 年度	100	60,009 m ²	32	47,489 m ²	68	12,520 m ²	1.10 人 / m ²	
平成 23 年度	111	67,888 m ²	41	57,451 m ²	70	10,437 m ²	1.25 人 / m ²	
平成 24 年度	112	68,002 m ²	41	57,451 m ²	71	10,551 m ²	1.27 人 / m ²	
平成 25 年度	114	70,707 m ²	43	60,156 m ²	71	10,551 m ²	1.31 人 / m ²	



写真 1-2-5-1 公園整備状況

向日市公園位置図

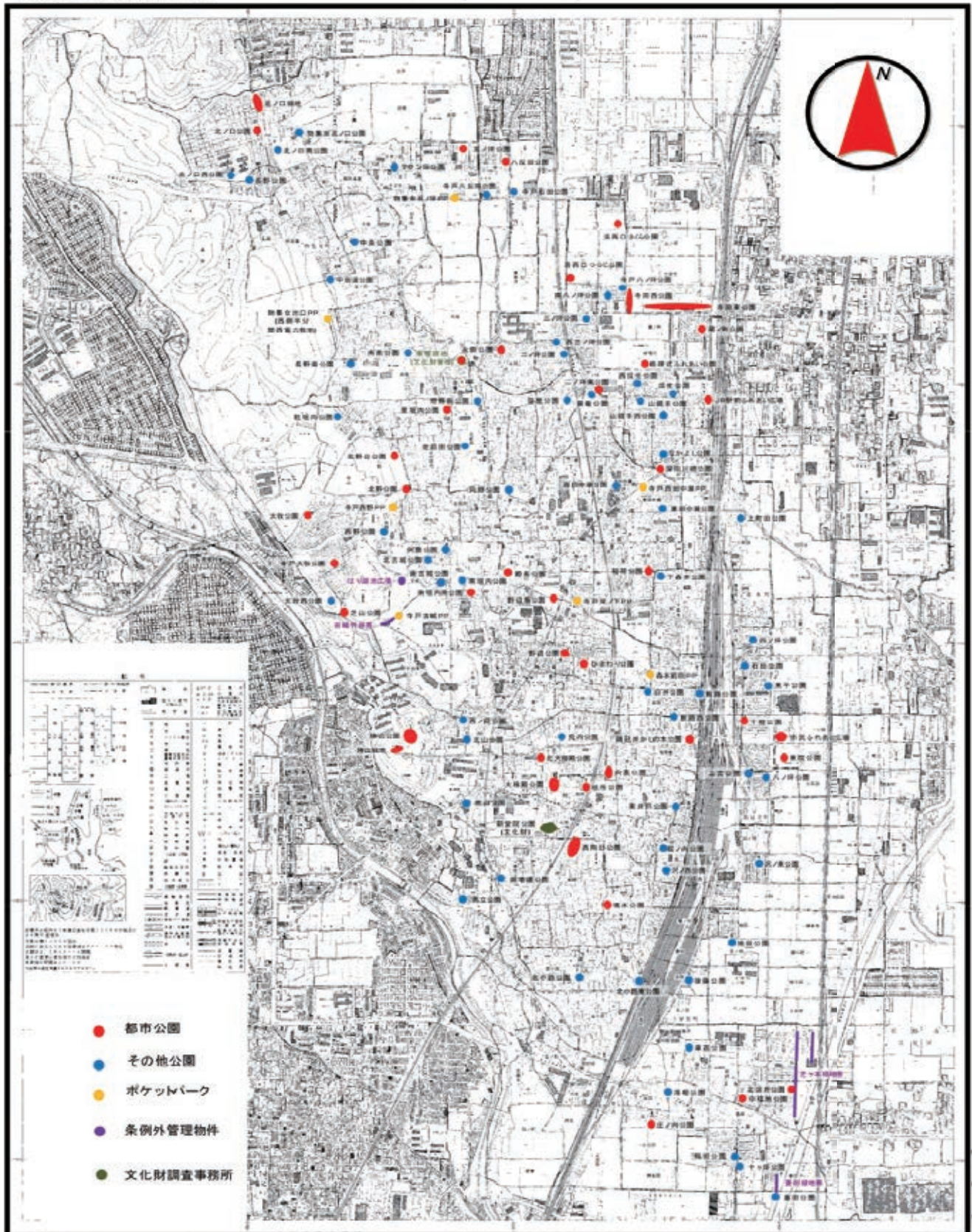


図 1-2-5-1 都市公園など位置図

公園の位置を頭上でプロットしているため、誤差があります。

②公共施設

公共施設としては、小・中学校といった義務教育施設や公民館、コミュニティセンター、天文館、市民体育館、市民温水プールなどの社会教育関連施設、保健センター、福祉会館、保育所などの保健・福祉関連施設などが市内各所に点在している。施設の建設時に埋蔵文化財発掘調査を実施し、重要な遺跡が検出された際には、その保存に努めるとともに、その遺跡を活かした整備を実施している。

市役所周辺には、市民会館、図書館、文化資料館、福祉会館などの公共施設が集中し、市民文化の拠点形成している。これら施設間では連携を図り、特に文化資料館については長岡宮跡などの情報発信、その他の歴史的文化遺産や観光資源ネットワークの拠点的作用を果たしている。なお、市民会館については、平成28年4月1日から一時閉館している。



写真 1-2-5-2 向日市文化資料館

市立図書館、文化資料館、京都府埋蔵文化財調査研究センターの三機関複合施設として整備



写真 1-2-5-3 向日市文化資料館常設展示風景

向日市文化資料館では、「長岡京の歴史と文化」をメインテーマとして常設展示を実施



写真 1-2-5-4 市民温水プール

長岡京跡の遺構を保存し、整備



写真 1-2-5-5 長岡京の鬼瓦をイメージしたモニュメント



写真 1-2-5-6 市民温水プール
エントランスに長岡京跡柱跡を整備



写真 1-2-5-7 長岡京の築地と柱をイメージした塀



写真 1-2-5-8 市民温水プール
プール底に長岡京跡柱跡を整備



写真 1-2-5-9 転落防止柵
長岡京の鬼瓦をイメージしたモニュメント

6 観光・レクリエーション資源

市域のほぼ中心に、長岡宮跡の中核である大極殿跡^{だいごくでん}をはじめとする宮跡関連の史跡が集中しており、西部の丘陵地や物集女街道（地方主要道西京高槻線）周辺に物集女車塚古墳などの古墳や陵墓が点在し、向日市の名の由来ともなった古社向日明神（向日神社）が長岡宮大極殿跡西方に、また、宮跡東方の京域に離宮の一つとみられる遺跡が東院公園として整備されている。

また、市域を通る西国街道は、京から西国へ向かう古くからの幹線道で、中小路家住宅（国登録有形文化財）や須田家住宅（京都府指定文化財）など、往時の面影を残す建物やまちなみも残る。

散策道として整備された道としては、向日丘陵の竹林を通り、古墳や自然探勝のできる竹の径^{みち}（詳細は「第1章第4節3府指定等文化財③選定文化財」を参照）などもある。この他、昭和25年（1950）に開設された京都向日町競輪場も存在する。

本市は、コンパクトな市であるため、これらの各観光資源を徒歩や自転車で巡ることが可能であり、適切な周遊道の整備や各種の情報発信を実施している。

祭りやイベントとして、向日神社での「神幸祭」^{しんこう}や「還幸祭」などの各種祭礼、「桜まつり」、長岡宮遷都を記念する「大極殿祭」、「向日市まつり」などが行われている。



写真 1-2-6-1 向日神社での桜まつり



写真 1-2-6-2 向日市まつり

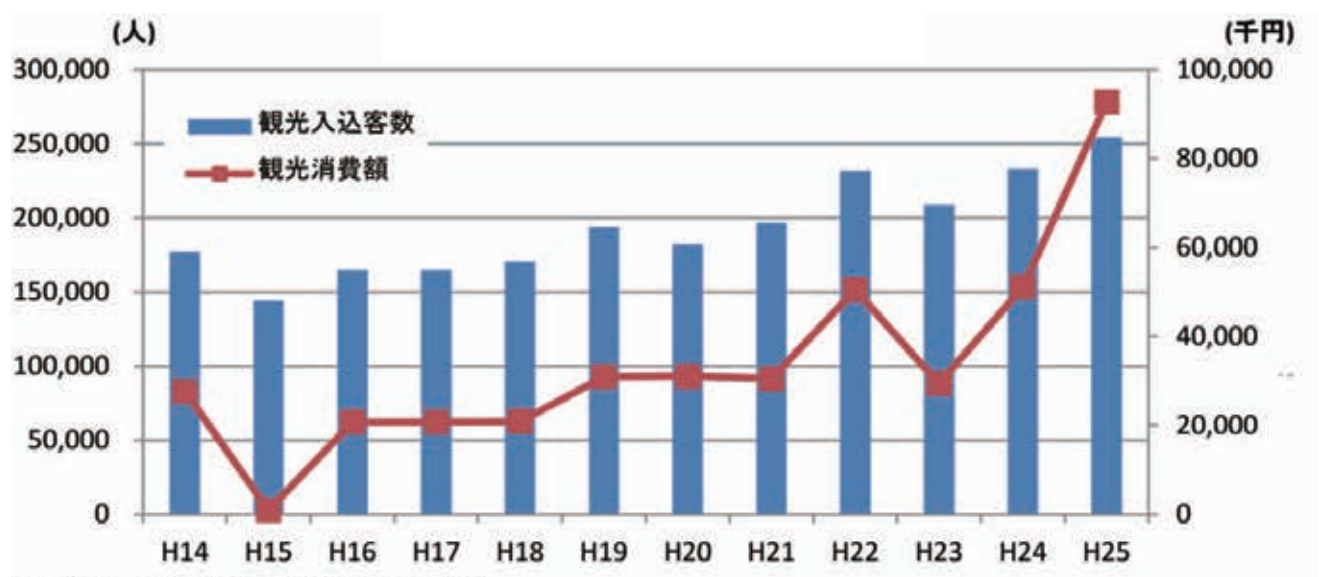


図 1-2-6-1 観光入込客数・観光消費額の推移

観光入込客数は、平成22年に20万人を突破し、観光消費額と合わせ、平成20年以降（震災の影響があったと考えられる平成23年を除く）増加を続けている。

観光入込客数の増加した要因として、平成21年（2009）に「辛いけど旨い」食べ物にこだわり発足した「京都向日市激辛商店街」と平成23年（2011）から開催している「KARA-1グランプリ」がある。激辛グルメの人気を競う催しで、全国各地から市民とほぼ同数の5万人が訪れる一大イベントとなった。

その他に、本市の「竹」をイメージしたたけうま全国大会〔平成15年（2003）～〕や竹を使った流し素麺〔平成19年（2007）～〕の開催、向日神社参道での駆け上がり大会、史跡長岡宮跡の整備により誕生した朝堂院公園での案内所設置〔平成22年（2010）〕などが挙げられる。



写真 1-2-6-3 KARA-1グランプリ



写真 1-2-6-4 京都向日市激辛商店街のマスコットキャラクター「からっきー」



写真 1-2-6-5 たけうま全国大会



写真 1-2-6-6 竹を使った流し素麺



写真 1-2-6-7 向日神社参道駆け上がり大会

第3節 向日市が歩んだ歴史

1 歴史的環境

西から丘陵、段丘、桂川氾濫原の低地と変化に富んだ地形を有する向日市では古くから連綿と人々の生活が営まれていた。

①旧石器時代から弥生時代

本市において、人々の活動の痕跡がうかがわれるのは1万～2万5千年前の後期旧石器時代にまでさかのぼる。

中海道遺跡や岸ノ下遺跡で細石刃^{せんとうき}や尖頭器^{でんちよう}が、殿長遺跡^{ゆうぜつ}で有舌尖頭器が出土している。

洪積世も終わりをつげ、縄文時代になると遺跡数も増大する。本市周辺では早期の押型文土器^{おしがたもん}が出土するが、市域では約3,000年前の縄文時代中期になって集落が形成され人々の定着がみられる。

南山遺跡では、近畿地方では出土例が少ない中期の大型石棒が出土し、祭祀を行う縄文人の姿が想像できる。

約2,500年前の縄文時代晩期には、低地にも集落が増加し、石田遺跡では土器や石器とともに多量の種実が出土し、農耕の始まりがうかがわれる。

また、東土川西遺跡では、丸木舟が出土し、河川を利用した狩猟や運搬など、移動手段が発達していたと考えられている。

京都盆地への初期弥生文化の伝播は、本市を含めた桂川右岸地域に求められる。農耕を基盤とする高度な文化の発展を暗示するかのよう、縄文時代からの集落が発展し遺跡数は更に増大する。

中期になると、遺跡（集落）数は激増し、拠点集落として位置付けられるような大集落が形成されるとともに、大集落からの分村化した集落も出現する。

森本遺跡では、段丘崖下の地形を利用し灌漑用水路^{かんがい}が営まれ、段丘上の生活区域と低地の生産区域という弥生中期のムラの一様相を示す遺跡となった。

特筆は、共同体祭祀の形態を考える上で重要な鶏冠井遺跡^{かいで}から出土した銅鐸^{どうたく}鑄型である。また、中期には、摂津や河内、近江、播磨などの諸地域との交流を示す土器が数多く出土し、本市が古代から交通の要衝であったことがわかる。



写真 1-3-1-1
殿長遺跡出土の
有舌尖頭器



写真 1-3-1-2
南山遺跡縄文中期石棒



写真 1-3-1-3 東土川西遺跡 縄文時代の丸木舟



写真 1-3-1-4 森本遺跡の水路

弥生時代に多くの集落を生み出した水田耕作を中心とする農業生産の発展は、その生産力の増大や水陸交通の利便性などを背景に、地域を先導する首長を生みだし、首長を葬るための墓である古墳が造営されるようになる。



写真 1-3-1-5 鶏冠井遺跡出土銅鐸鋳型



図 1-3-1-1 鶏冠井遺跡復元図

②古墳時代から奈良時代（長岡京遷都まで）

西部の向日丘陵上においては、古墳時代前期の3世紀後半から約100年の間に五塚原古墳、元稻荷古墳、寺戸大塚古墳、妙見山古墳と100m前後ある地域の盟主の墓にふさわしい巨大古墳が次々に築造され、大首長墓群が形成された。これら前期古墳群の系譜は、大和政権成立と社会構造を考える上で重要な位置を占めている。

中期～後期前半には、丘陵裾部から低位段丘上に前方後円墳と考えられ、家形埴輪が出土した中ノ段古墳や子持ち勾玉が出土した山開古墳があるが、南条古墳群、山畑古墳群など小規模な古墳が営まれ、前期首長の系譜が没落したようである。なお、これらの古墳は、奈良時代の乙訓郡衙や長岡京の造営で破壊されている。

6世紀になると、この地域に、継体大王の「弟国宮」である王宮が営まれる。継体の「樟葉宮」「筒城宮」「弟国宮」の三宮は、すべて淀川流域に所在し、この流域の政治勢力にとって継体朝の成立は大きな転機となった。

市北部の物集女町の段丘先端部に、巨大な横穴式石室をもつ物集女車塚古墳は、石室構造や出土遺物から継体朝の政治変動の契機となったものとも考えられる。なお、物集女車塚古墳の整備は、昭和58年(1983)から行われ、平成7年(1995)3月に横穴式石室を含め整備が完了した。以降、石室の一般公開を行っている。

この物集女車塚古墳を最後に、市域では前方後円墳などの大型の古墳は営まれなくなり、丘陵裾部に群集墳が築造され、やがて仏教伝来とともに有力豪族は寺院を建立するようになる。寺戸町に昭和30年代まで所在した宝菩提院はこの頃の創建にさかのぼる。

また、この頃、王権中枢部と密接に直結した秦氏が築造した「葛野大堰」によって、桂川から取水した灌漑用水路が市域を南北に連なるように設けられる。東寺百合文書(国宝)には、用水絵図や維持管理の記録が残り、日本灌漑史研究史上、名高い水路の1つで、現在でも周辺の水田を潤している。

日本で初めて本格的な都城として藤原京が営まれるようになると、行政区域の単位として本市域に

は「^{おとくにのこおり}弟國評」が設置された。その後、大宝律令の制定によって、「^{こおり}評」は「^{こおり}郡」に改められ、本市域は^{やましろのくににおとくにぐん}山背国乙訓郡などに属するようになった。

条里制は、現大山崎町を一条にして北に向かうが、市域は八条から十三条にあたる。乙訓郡の郡衙は「郡の馬場」という地名の残る鶏冠井町勝山中学校付近と推定されており、建替えを示す建物跡などを発掘調査により検出している。

寺戸町の西丘陵中腹には、白鳳期の寺院跡である宝菩提院〔願徳寺（廃寺）〕があり、乙訓郡に隣接する葛野郡を本拠とし、周辺一帯を開発した秦氏と関係のある寺院とみられている。

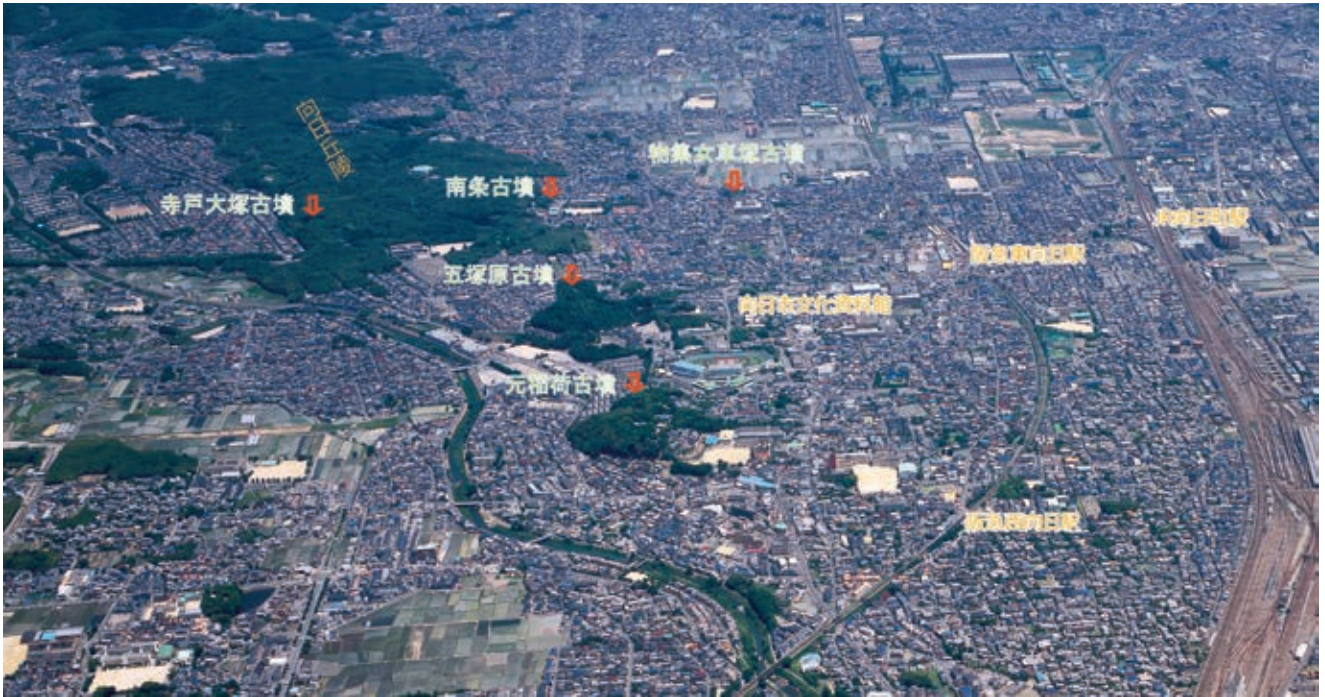


写真 1-3-1-6 向日丘陵の古墳分布図



写真 1-3-1-7 物集女車塚古墳全景



写真 1-3-1-8 物集女車塚古墳横穴式石室



写真 1-3-1-9 宝菩提院廃寺遺跡湯屋遺構検出状況



図 1-3-1-2 宝菩提院廃寺遺跡湯屋遺構復元図

奈良時代には、乙訓地域屈指の古社である向日神社が創建される。

同社は、京都嵐山から連なる向日丘陵の南端の狭隘部に鎮座し、山城盆地の南半部や天王山と石清水八幡宮、木津川・宇治川・桂川の三川が合流して淀川となる地点から、摂津（大阪）との国境まで見わたることができる良好な地に立地する。

元は、丘陵上に鎮座する「向日神」を祀る上ノ社と「火雷神」^{ほのいかづち}を祀る下ノ社という別の神社で、いずれも延喜式神名帳^{じんみょうちょう}に記される古社であった。

火雷神社は、養老2年（718）の社殿新築にあたり玉依姫命^{たまよりひめのみこと}と神武天皇を合祀したが、中世に至ると衰微し、建治元年（1275）には向神社が併祭し、向日神社と社名を改めて今日に至っている。



写真 1-3-1-10 向日丘陵突端部に鎮座する向日神社（本殿北側には、元稻荷古墳が所在する）

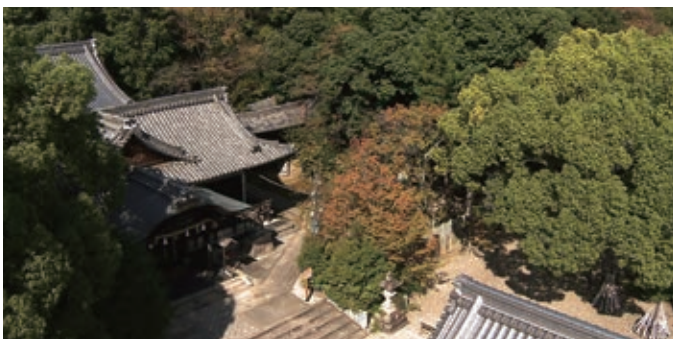


写真 1-3-1-11 向日神社全景（南東から）



写真 1-3-1-12 向日神社から三川合流部や天王山、石清水八幡宮を望む

③長岡京期

天応元年（781）、桓武天皇が即位し、長く続いた平城京での人心を一新し律令体制を再建すべく、延暦3年（784）に平城京を廃し、新都を水陸交通の要衝である山背国乙訓郡に移した。長岡京は、現在の向日市、長岡京市、京都市、大山崎町の東西4.3km、南北5.3kmの範囲に及ぶ。

向日丘陵の安定した低位段丘中位面である現在の向日市鶏冠井町を中心とする市域、東西約1km、南北約1.6kmに王宮の中枢部を構え、京都西山から桂川の縁辺部まで条坊を敷設した。

続日本紀の延暦6年（787）10月8日条の詔に「朕、水陸の便なるをもって都をこの^{むら}邑に遷す」とあるように、古来からこの地が水陸の利便性が優れていた。外港として淀川には山崎津が設けられ、桂川の大小の支流となる河川を利用し都の中に直接物資の運搬が可能となった。また、駅家や道路の整備により盤石な交通網が形成された。

本格的な都城として建設が進められたが、天皇の近親者に不幸が続き、それが起因し^{さわら}早良親王の怨霊とされるなど、水陸の利便性が裏腹となった水害に見舞われたことなどから、わずか10年で廃都となり、延暦13年（794）に平安京へ移された。新都の建設に伴って建物の多くが平安京へ移され、条坊も次第に廃絶し、左京域を中心に再び^{だいくでん}条里の農村に戻っていった。

宮跡は、昭和39年（1964）4月27日に大極殿跡・小安殿跡が「長岡宮跡」として国史跡に指定された。その後、長岡宮に関連する重要な遺跡が検出された場合、同一名称で順次、追加指定の措置をとっている。

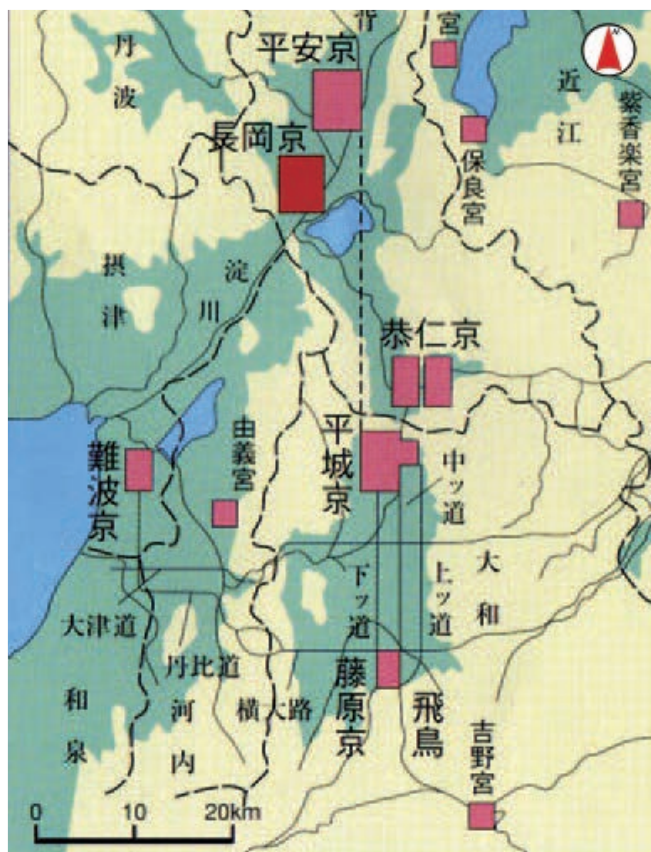


図 1-3-1-3 古代都城変遷図

④平安時代（長岡京廃都）から中世

延暦13年（794）に都が平安京に遷都された後、旧都である長岡京（旧京）の条坊街区を一部利用しながら、土地の班給が行われた。

太政官符（「^{るいじゅうさんだいきやく}類聚三代格」巻十五）によると、延暦14年（795）正月29日に桓武天皇は、^{ちよくししよ}勅旨所と近衛府に対し、長岡旧京の土地を園地として^{このえふ}下賜するよう命じている。この官符によると^{ちよくしあいばたけ}勅旨藍圃には「長岡京左京三条一坊八町」ほか計七町が、^{このえのはすいけ}近衛蓮池には「三条一坊十町」の一町が割り当てられている。このように、平安時代以降、本市を含め長岡旧京の条坊全体に条里地割が再施行され、農地化が進み、公家や社寺が荘園と



写真 1-3-1-13 向日丘陵に営まれた桓武天皇皇后陵

して管理するようになる。

なお、桓武天皇の皇子である淳和天皇火葬塚や桓武天皇皇后陵（伝高皇陵）が、向日丘陵に造られていることから、平安新京になった廃都後も、本市域は特別な地域であったことがわかる。

また、「土佐日記」によれば、承平4年（934）2月、土佐守の任を終えた三十六歌仙のひとり紀貫之が帰京の途中、「山崎」から西国街道を沿って「島坂」（現向日市上植野町御塔道付近）を経由したことが確認される。



写真 1-3-1-14 「島坂」推定地に建つ石塔寺

このことより、本市を南北に縦断する西国街道は、平安時代には既に整備されていたことがわかる。

平安時代中期になると、国風文化が広がり、大陸の文化であった竹製品が日用品として利用が増してきた。この頃に編纂された「延喜式」によると、本市を含めた山城国乙訓郡と相楽郡には、宮中へ竹や箸を献納する竹林があったと記されており、本市が古くから竹と関わりを持っていたことがうかがわれる。

中世には、物集女荘、寺戸荘、鶏冠井荘などが設けられ洛外の荘園として発達する。

鎌倉時代後期になると、これらの荘園の中の農民は、水利の共同利用や配分、水路や道路の修築、境界紛争、戦乱や盗賊からの自衛などを契機として、地縁的な結合を強めるようになる。そして、荘園を超えて農民などによる自治的共同組織である惣（郷）が成立した。

これら諸郷の産土神として信仰されたのが、向日丘陵の南に東面して建つ向日神社で、参道は西国街道から延びている。

向日神社は、奈良時代に創建されたと伝えられ、「延喜式」神名帳に向神社とみえる古社で、現在の本殿（重要文化財）は応永29年（1422）に物集女、寺戸、鶏冠井、今里（現長岡京市）など周辺諸郷によって造営されたことが棟札（重要文化財）に記されている。神社の境内は、郷村の土一揆の集結や国人の会合などにも使われた。

応仁の乱などを経て成長した国人には、竹田氏、物集女氏、鶏冠井氏などがおり互いに覇権を競ったが、やがて織田信長が京に入り山城地方を支配下におくと、在地の国人は滅びていった。

市域に残る遺跡として、物集女町の段丘先端部に物集女氏の居城である物集女城跡がある。同城跡は、方形単郭式で、堀や土塁の一部が残り、近年の発掘調査で周辺から家臣団の居住域とみられる区画なども検出されている。

中世に建立された寺院に石塔寺、真経寺などがある。真経寺は鎌倉時代末期、日像が関西最初の日蓮宗寺院として創建したもので、江戸時代に南、北の二寺に別れ、北真経寺には僧侶の学問所である檀林が置かれた。現在の本堂は当時の講堂にあたり、府の登録文化財となっている。



また、北真経寺の境内は、長岡宮の内裏跡にあたり、

写真 1-3-1-15 物集女城跡航空写真

西方の^{だいいりないかくつじいかいろうあと}内裏内郭築地回廊跡は史跡に指定され整備されている。石塔寺は、日像が建立したという石塔を由緒に文明年中（1469～87）に創建され、盛衰を経た後、明治初期に廃寺となった大極殿西側の興隆寺の本尊や什物を引き継ぎ、現在に至っている。毎年5月3日には鎌倉時代から伝わるという日像上人に因んだ「^{かいでだいもくおどり}鶏冠井題目踊」が奉納される。鶏冠井題目踊は、京都洛北の松ヶ崎や修学院と並び全国に3か所のみに残る特異な民俗芸能である。この中でも、鶏冠井は本尊に向かい位置を変えず、音頭の切れ目ごとに「南無妙法蓮華經」の題目が唱えられるもので、輪になって踊る盆踊り形式の念仏踊りが松ヶ崎など各地に伝わるのに対し、より古い形式を残していると考えられる。



写真 1-3-1-16 鶏冠井題目踊（京都府指定文化財）

⑤近世～向日町の成立

向日市の前身となった向日町は、向日神社門前東側の西国街道沿いに形成された町で、向日神社への参道辺りを中心として、北は物集女街道との分岐点辺りまで続いていた。

向日町の成立は、天正20年（1592）に豊臣秀吉が向日明神（向日神社）前に新町を造ることを認めたことに始まり、西国街道西側の向日明神領の町と上之町、下之町からなっていた。

江戸時代には、当市域は京都所司代の管轄下となり、公家領、幕府領、禁裏御領、寺社領などに細分された。

先の向日町は、在郷町として発展を続け、元和2年（1616）の古文書によると175軒が軒を連ねていたという。この古文書には、宿屋、油屋、酒屋、呉服屋、両替屋など、その内訳が全て記されている。西国街道は、京の東寺口から向日市域を通り西国に向かう古くからの街道で、江戸時代の道標や常夜燈が残るほか、現在の幹線道から外れた旧道には古いたたずまいを残すまちなみが残っている。



写真 1-3-1-17 西国街道に面し建つ常夜燈（計画認定時）

⑥近代、現代

明治以前の向日市域は、江戸時代の初頭に形成された町場である「向日町」と物集女、寺戸、鶏冠井、上植野、西土川、白井の6か村から形成されていた。

その後、明治7年（1874）に西土川、白井両村が合併し、森本村となった。

明治22年（1889）4月の市制町村制の施行により、江戸時代以前の「向日町」と周辺の5か村が合併し、新たな「向日町」が誕生した。以降、近隣の人々が「むこうまち」と言う時、行政区画としての「向日町」

と向日神社門前に開けた近世初頭からの町場である「向日町」と、2つが混在して呼称されるようになった。これは、市に移行した今日でも続いている。

明治9年(1876)7月には向日町と大阪間に鉄道が開通し、京都府内最初の駅として「向日町駅」が開業する。本駅は、西国街道と線路の交差する場所に設けられたため交通の利便性が高まり、向日丘陵から産出される特産の竹材やタケノコの大量輸送が可能になるとともに、本市を含めた桂川右岸の西山に点在する社寺参詣の起点として地域に好景気をもたらし、町場としての「向日町」は一層の賑わいをみせるようになる。

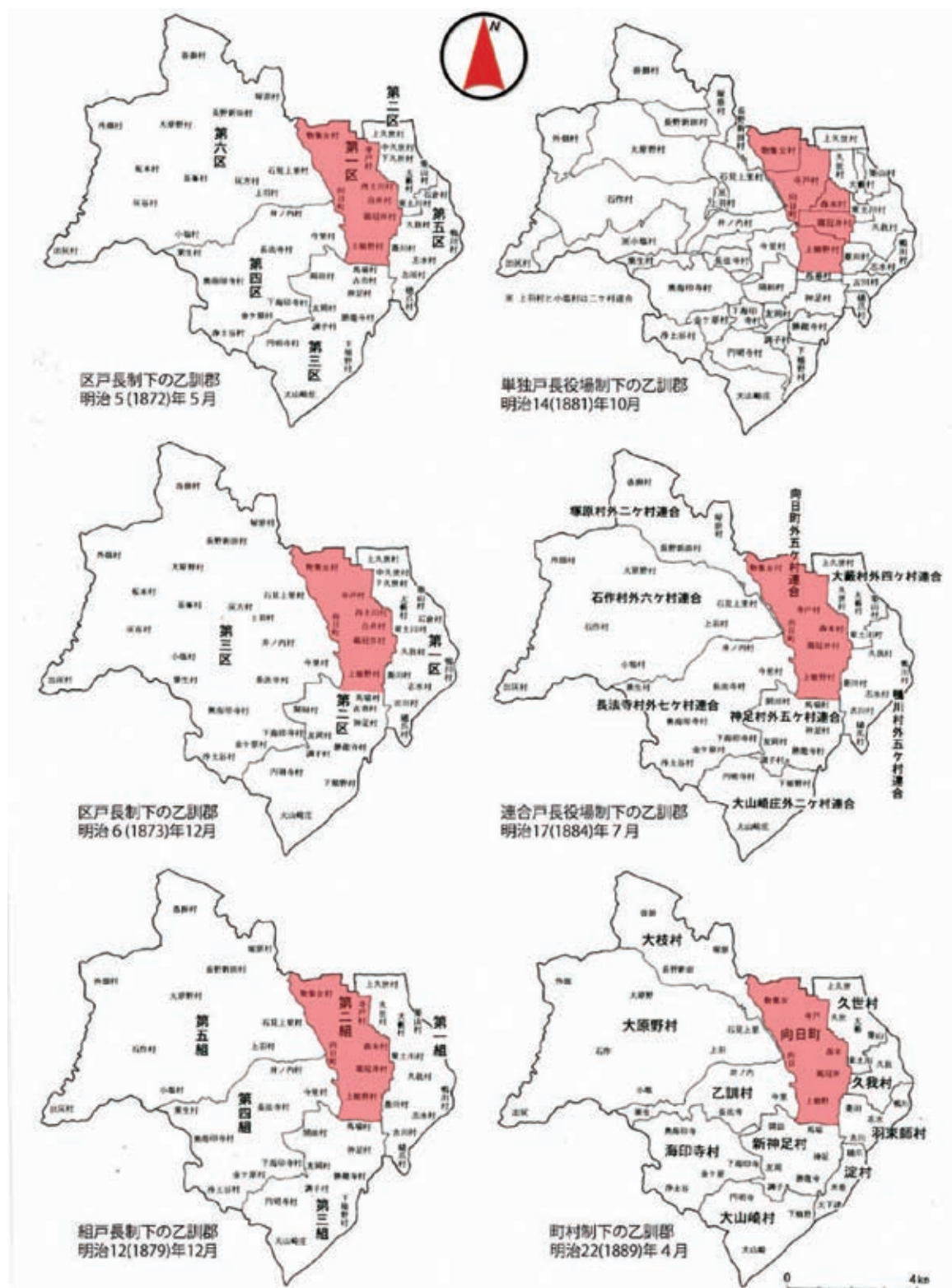


図 1-3-1-4 明治初期の乙訓郡行政区の変遷図

明治 25 年 (1892) に平安遷都千百年記念祭と内国勸業博覧会の開催が内定する中、桓武天皇の業績を顕彰するため、山背遷都の最初の地である「長岡京」について所在地を考証する「長岡宮城遺址創設会」が発足し、後に発掘調査で明らかとなった大極殿跡から北西に約 100 m の地に明治 28 年 (1895) に顕彰碑が建立された。

この建立を記念し、毎年、長岡京遷都の日の 11 月 11 日に「大極殿祭」が行われるようになり、今日まで続いている。

農業面では、明治 41 年 (1908) に市域北部の条里制水田を利用して米の品種改良の研究が行われ、山本新次郎が現在のコシヒカリの起源ともなる「旭米」を誕生させた。

交通面では、昭和 3 年 (1928) に現在の阪急京都線にあたる新京阪線により京都西院と大阪天神橋間が開通し、市域には東向日町、西向日町の 2 駅が設置される。また、この開通に合わせ、乗り合い自動車路線も整備される。

昭和 4 年 (1929) には、新京阪鉄道会社により田園構想に基づき西向日住宅の開発が行われるとともに、西国街道と駅間を結ぶ道路整備や占用水道の布設などインフラ整備が進み、沿線の農村が都市近郊型の住宅に変貌を遂げ、ますます住宅開発が行われるようになる。

開発が盛んに行われる中、昭和 29 年 (1954) 12 月の末に阪急西向日駅の北約 30 m の地において、長岡京の発掘調査が実施され、翌年正月に平安宮会昌門に相当する遺構が中山修一らの手で検出された。以降、開発と比例して発掘調査が実施され、今日まで 2,000 回を超える調査が行われている。この間、大極殿や朝堂院跡など調査により重要な遺構が検出された場合は、その都度、史跡指定を受け保存を図っている。

平成になって、これまでの長岡京跡の調査研究や展示会や講演会など啓発とともに、向日神社や古墳、歴史的建造物などの歴史遺産などを連結し、地域や観光の振興を図っている。

このように長い歴史を有する向日市は、特に長岡京遷都にあたってはその中心地となるなど歴史の表舞台に登場した地であり、住宅都市へと変貌を遂げた今日でも狭小な市域の場所に、これを物語る



写真 1-3-1-18 JR向日町駅前で検出された西国街道



写真 1-3-1-19 新京阪乗合自動車開通記念マッチラベル



写真 1-3-1-20 開発が進む中で行われる発掘調査
昭和 36 年 (1961)

歴史・文化資源が重層的に数多く残り、溶け込むように景観が形成されている。

これらの新たな地域の歴史・文化遺産の価値化と整備、風土を活かしたまちづくりを推進しているところである。



写真 1-3-1-21 史跡整備地で実施するスタンプラリー

2 向日市の歴史に関わる主な人物

① 継体天皇（けいたいてんのう）



允恭天皇 39 年 (450) 頃 ～ 継体天皇 25 年 (531) 頃

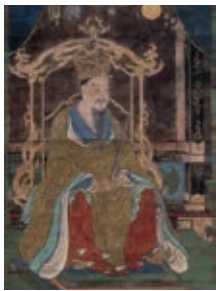
第 26 代天皇。「日本書紀」によれば、武烈天皇^{ぶれつ} 8 年 (506) に武烈天皇^{こうし}が後嗣を定めず崩御したため、越前にいた応神天皇五世の孫の男大迹王^{おおどのおう}を迎えた。

男大迹王は河内の樟葉に宮を置き、継体天皇元年 (507) に即位した。その後、山背の筒城（京田辺市付近）や弟国（本市、長岡京市付近）に宮を移し、即位 20 年後に大和に入り、磐余玉穗宮^{いわれたまほのみや}を築いた。

天皇は、淀川の水運の便を考慮し、その流域に宮を置いたといわれる。これは、朝鮮半島の任那^{みまな}における失地回復の救援軍の派遣や、これを遮ぎって起こした筑紫国造磐井の反乱を鎮めるなどに地の利があったためと考えられている。

本市の物集女車塚古墳は、横穴式石室の形態や出土遺物の特徴から、継体天皇の弟国宮を支えた豪族のものと推測されている。

② 桓武天皇（かんむてんのう）



《比叡山延暦寺所蔵》

天平 9 年 (737) ～ 延暦 25 年 (806)

第 50 代天皇。白壁王（のちの光仁天皇）の第一王子、山部王と称された。式家の藤原百川^{ももかわ}らの政争により、宝亀 4 年 (773) に皇太子に、天応元年 (781) には光仁天皇から譲位されて天皇となる。

平城京における肥大化した仏教各寺の影響力を牽制し、また天武天皇流が断絶し天智天皇流に皇統が戻ったことなどから、秦氏の影響力が強く、水陸交通の便が良好な、本市を中心とした山背国乙訓郡長岡邑に遷都した。

天皇は、延暦 10 年 (791) に坂上田村麻呂を征夷大將軍とし蝦夷征伐を、延暦 13 年 (794) に藤原^{つぐただ}・菅野真道^{すがのまみち}らに国史編纂（797 年『続日本紀』として完成）を、延暦 23 年 (804) には空海・最澄らを唐に派遣するとともに、勘解由使^{かげゆし}を設置して国司の監督を強化し、天皇による強力な政治を行った。

③ 日像上人（にちぞうしょうにん）



文永 6 年 (1269) ～ 康永元年 / 興国 3 年 (1342)

鎌倉時代の日蓮宗の僧。俗姓は甲斐源氏の流を汲む平賀氏。下総国の出身。肥後阿闍梨^{あじり}と称される。四条門流の祖。

日蓮の高弟である日朗上人の弟子。日蓮上人に京都での布教活動と天皇への布教を遺命され永仁 2 年 (1294) に上洛する。しかし、他宗派の迫害を受けるなど京都での布教活動は困難を極め、徳治 2 年 (1307) に後宇多上皇の勅命で、京を追われ土佐国の幡多への流刑を命じられる。西国に向かう途中、向日神社の明神の化身となった二羽の白鳩と老人に引き止められ、西国街道沿いの大石（現在の説法石）に腰を下ろして説法を行った。これを聞いた多くの村人が上人に帰依して、法華經信者となったといわれる。

「鶏冠井題目踊」は、日像の布教活動が生んだ踊りである。

④ 前田玄以（まえだげんい）



天文 8 年（1539）～ 慶長 7 年（1602）

戦国時代から安土桃山時代にかけての僧侶・武将・大名。豊臣政権の五奉行の一人。

織田信長の臣下となり、後に信長の命令で織田信忠付の家臣となる。天正 10 年（1582）の本能寺の変に際しては、三法師を連れて京都から脱出、美濃岐阜城、さらに尾張清洲城に逃れた。

天正 11 年（1583）から京都所司代に任じられたが、天正 12 年（1584）に羽柴秀吉の勢力が京都に伸張すると、秀吉の家臣として仕えるようになる。

豊臣政権においても、京都所司代として活躍し、天正 20 年（1592）に「向日町」名の始まりである「向日前新町」が西国街道沿いに町場として成立する定書を出す。

⑤ 六人部是香（むとべよしか）



寛政 10 年（1798）～ 文久 3 年（1864）

幕末の向日神社神官、国学者、神道家、歌学者。号は葵舎、^{あおいのや}簫舎、^{すずのや}。

文政 6 年（1823）、江戸に出て平田篤胤^{あつたね}の門人となり、平田派関西の重鎮として重んじられた。その著「^{けんゆうじゅんこうろん}顕幽順考論」は、人間存在を顕と幽との両世界に分けて神の性質について説いたもので、孝明天皇に進講するという栄誉に浴した。晩年は京都三本木に神習舎^{しんしゅうしゃ}を開いて門人に教授した。歌学の造詣深く、歌格研究の集

大成ともいふべき「長歌玉琴」を著した。

向日町における文化サロンの牽引者。

⑥ 山本新次郎（やまもとしんじろう）



嘉永 2 年（1849）～ 大正 7 年（1918）

農業研究者。

物集女町で農業を営む傍ら米に品種改良を行う。

「西の旭、東の亀ノ尾」という言い伝えが、育種家仲間にある。良食味品種をつくろうと思えば、明治時代に生まれたこの両品種の遺伝子を導入するのがもっとも近道というのである。

明治 41 年（1908）、山本が 59 歳の時、「日ノ出」という品種の米を栽培中に、倒伏に強い特異な株を見つけたのが『旭米』品種の始まりという。たびたび試験場に足を運び、技術の習得に努めていた結果が、多収・高品質な品種の大発見に繋がり、種子を希望する農家が殺到した。

山本の偉大さは、この品種を発見だけでなく、その普及のため公正な評価を求めている点にもみられる。「コシヒカリ」や「ひとめぼれ」など良質品種の源流ともなる。

⑦ 笹部新太郎（ささべしんたろう）



《西宮市笹部桜コレクション：白鹿記念酒造博物館寄託》

明治 20 年 (1887) ～ 昭和 53 年 (1978)

桜の研究家。東京帝国大学在学中から桜の研究を始め、岐阜県の「荘川桜」の移植、大阪造幣局の桜の管理・育成などに関わった。

昭和 10 年 (1935)、当時の向日町字向日・寺戸にまたがる丘陵地の中の 3,000 坪ほどの土地に桜苗圃をつくり、苗木の育成や接ぎ木の実験を行うなど、日本古来の桜の保存・改良に特に力を尽くした。

「桜男」「桜博士」と呼ばれ、新聞に連載されテレビドラマ化もされた水上勉の小説「櫻守」に登場する竹部庸太郎のモデルにもなっている。

⑧ 中山修一（なかやましゅういち）



大正 4 年 (1913) ～平成 9 年 (1997)

歴史地理学者。長岡京跡発掘調査研究所長。

西京高教諭、京都文教短大教授などを務める。

昭和 28 年 (1953) に「乙訓郡誌」の長岡京を含む奈良時代の執筆依頼を契機に「幻の都」といわれていた長岡京の研究に取り組む。

当時、長岡京は、文献上だけのものといわれていたが、長岡京が平安京と同様に碁盤の目のように区画されていたことを明らかにし、長岡京の全体の復元図を作成した。

また、昭和 29 年 (1954) 12 月には、阪急西向日駅前において、はじめて所在地を確定する発掘調査を行った。

⑨ 小林清（こばやしきよし）



大正 5 年 (1916) ～昭和 50 年 (1975)

歴史研究家。「乙訓の文化遺産を守る会」初代事務局長。

鶏冠井町大極殿に居住し、長岡宮跡を中心とした乙訓地方の文化遺産を守るため、研究活動を進めるとともに、会報「乙訓文化」と会誌「乙訓文化遺産」の発刊など長岡京跡の情報発信に努めた。

発掘後間もない長岡宮跡の基礎資料を作るため、出土瓦について綿密な調査を行い、難波宮瓦と平城宮瓦との関係や長岡宮窯瓦について考察し刊行した「長岡京の新研究」は今も研究指針となっている。

第4節 向日市の文化財と文化活動

向日市の文化財の内訳は、令和2年（2020）3月31日現在で、国指定が6件、国登録が24件、京都府の指定などが6件、市指定文化財が27件となっている。

表 1-4-0-1 向日市の文化財 一覧表

種別			国		府			市	計
分類	細別		指定	登録	指定	登録	選定	指定	
有形文化財	建造物		1	24	2	1			28
	美術工芸品	彫刻						8	8
		絵画	1					2	3
		古文書	2					5	7
		歴史資料						1	1
		考古資料			1			7	8
無形文化財								0	
民俗文化財	有形の民俗文化財								0
	無形の民俗文化財				1			2	3
記念物	遺跡		2					2	4
	名勝地								0
	動物、植物、地質鉱物								0
文化的景観							1		1
伝統的建造物群									0
文化財の保存技術									0
計			6	24	4	1	1	27	63

1 国指定等文化財

重要文化財として4件（建造物1件、美術工芸品3件）、史跡2件がある。

重要文化財（建造物）は、応永25年（1418）に事始めを行い、同29年（1422）に上棟（建築）され、創建年時が確実な室町時代の代表的な流造の建築物である「向日神社本殿」1件である。本殿は、三間社流造、檜皮葺で、梁間5.62m、梁間の主屋3.24m、前庇2.77mを測る。正面三間の柱間のうち、中央間のみを戸口とし、両開きの板唐戸を設け両脇間に寺院建築に見られる連子窓が付く

ことが特徴である。附として、棟札5枚があり、物集女や寺戸など現在の向日市周辺七郷の人々の名が記され、共同の鎮守であったことや天保年間に大改修が行われたことなどがわかる。



写真 1-4-1-1 向日神社本殿

重要文化財（美術工芸品）は、絵画 1 件、古文書 2 件である。

絵画は、「紙本著色十二類絵巻（三巻）」で、南北朝から室町時代にかけて鳥獣を擬人化した異類物文芸が盛んとなる中、当時の趣向を反映して鳥獣の歌合わせと合戦を盛り込んだものである。日本の戯画の伝統に立って、土佐派系の穏便な描写を以て、一種滑稽味を加えながらも描かれた格調高い一作である。

古文書は、「紙本墨書『日本書紀（神代紀下巻）』と尊性法親王消息そんしょうほうしんのうしゅうそくほんしゅうほけきょう翻摺法華經（開結共十巻）」がある。

日本書紀は、奈良時代の養老 4 年（720）に完成した神代から持統天皇までの歴史書で、三十巻のうち巻第二、神代一卷の写本がある。所蔵家の名を取り「六人部本」むとべほんとも呼ばれる。延喜 4 年（904）の奥書があるが、奥書も含め南北朝期の写本である。所有者である向日神社に伝わった由来は不明だが、同神社の神職を代々務める六人部家は学者の家系で、神代紀下巻に祭神としていた神々が登場することから研究目的で入手したとのことである。

法華經は、応永元年（1239）に没した天台座主尊性そんしょう法親王の追善のために作られた版本供養經で、法親王生前の自筆消息をつなぎ合わせて料紙とし、紙背に法華經（開結共）十巻を摺写している。本經はもとは各品一卷に装幀された一品經で、表紙外題や各品内題、版式の差異、料紙の状態などによって、原状は法華經二十八巻、無量義經三巻、觀普賢經一卷の三十二巻本であったことが判明する。紙背の消息はおよそ百十七通、親王が天台座主であった寛喜年間から嘉禎年間に至る間を中心としたもので、その内容は、法親王の地位を反映して朝廷の趨勢、比叡山を中心とする社寺の動向などを伝え、かつ物語絵巻、絵師などに関する文芸史料も含まれている。また、本法華經は、鎌倉時代末に鶏冠井町に日蓮宗を伝えた日像が宮中から下賜されたものを、鶏冠井村民に信仰の証しとして授与したものである。

史跡は、「長岡宮跡」と「乙訓古墳群」の 2 件である。

「長岡宮跡」はだいごくでん大極殿地区 2,752.64 m²が、昭和 39 年（1964）4 月 7 日に指定された。以後、平成 28 年（2016）10 月 3 日までに、10 か所が追加指定され、5 地区に分散する。指定面積は、15,686.45 m²である。阪急西向日駅周辺の安定した低位段丘面に長岡京跡の中心部の宮が配置され、その中で政治が司られた最も重要な施設である、大極殿・小安殿（大極殿後殿）、大極殿閤門、内裏内郭築地回廊、築地、朝堂院西第四堂、会昌門（朝堂院南門）、宝幢、楼閣地区が指定されている。



写真 1-4-1-2 日本書紀（神代紀下巻）



写真 1-4-1-3 尊性法親王消息翻摺法華經（開結共十巻）



写真 1-4-1-4 史跡長岡宮跡（朝堂院西第四堂地区）

なお、古墳については、寺戸大塚古墳が平成 27 年（2015）3 月 10 日に史跡指定された。その後、平成 28 年（2016）3 月 1 日、寺戸大塚古墳に五塚原古墳、元稲荷古墳、南条古墳、物集女車塚古墳の市内の 4 基と、京都市、長岡京市、大山崎町の古墳を加えた合計 11 基が、「乙訓古墳群」と名称を変更し追加指定された。

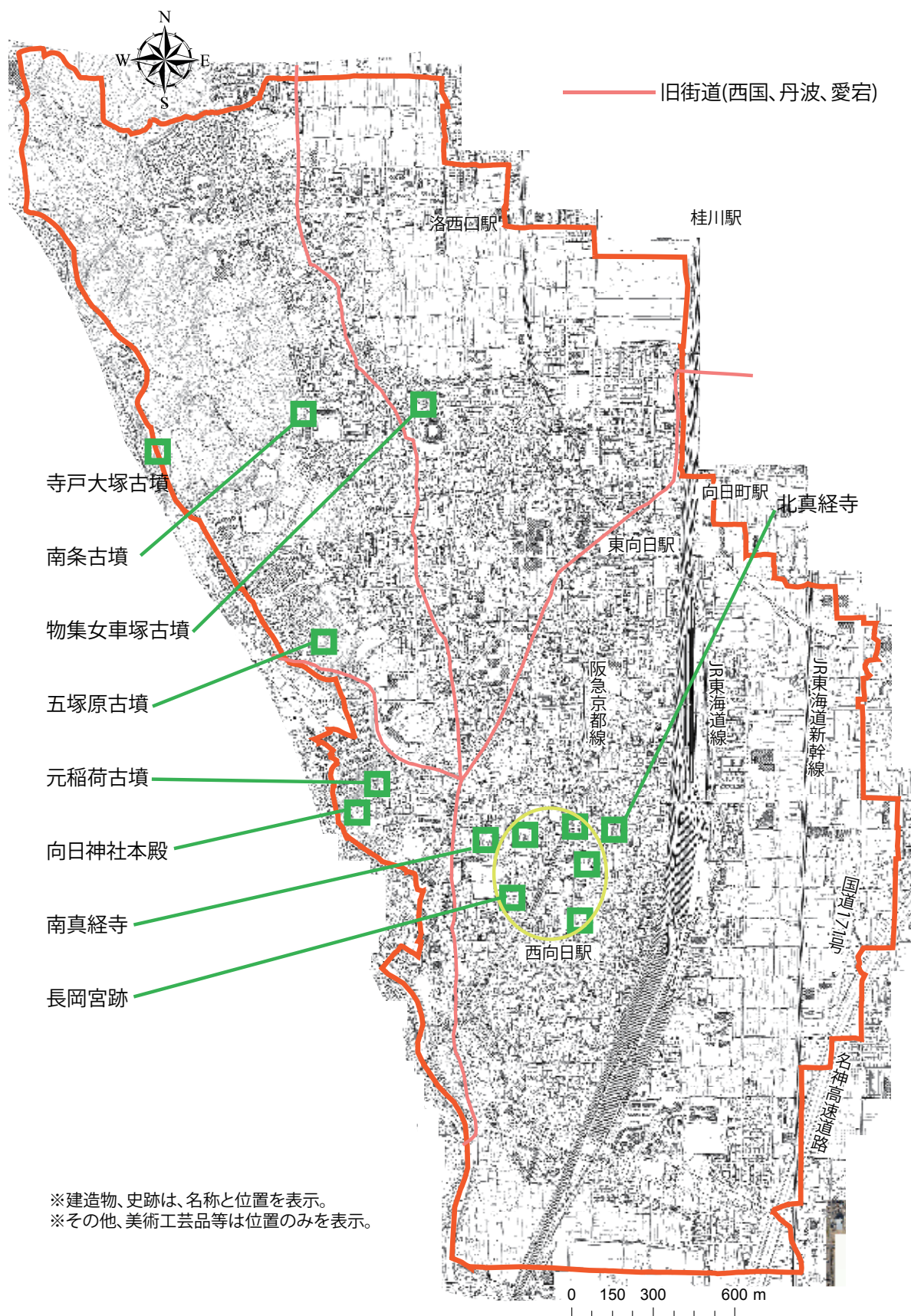


図 1-4-1-1 向日市の国指定文化財 位置図

2 登録有形文化財（建造物）

登録有形文化財（建造物）24 件のうち、6 件が中小路家住宅、5 件が旧上田家住宅にある。

中小路家は、江戸時代中期頃から続く総名主を務めた旧家である。屋敷の正面（東面）は西国街道に面しており、土蔵造りの穀蔵、長屋門、板塀、小屋が並び建ち、前庭を介して瓦葺の主屋が屋敷中央にあり、周囲の民家とともに往時の家なみを良く残している。当家の主屋の建築年代は、弘化 5 年（1848）正月の記述のある普請願に大破のため建て替えたとあり、規模や間取りが一致することから、この時の再建であることが明らかである。明治 15 年（1925）の地券に「一本家 桁行五間半梁行三間半、一土蔵 桁行二間梁行二間、一土蔵

桁行二間梁行一間半、一小屋 桁行三間梁行二間、一物置 桁行二間梁間一間余」の記載があり、それぞれ現在の主屋、内蔵、外蔵、離れ、小屋に相当する。このうち外蔵は現存していないが、大正 14 年（1925）4 月新調の家相図は、現在の屋敷状況とほぼ一致している。内蔵は二階建て土蔵であり、外壁は漆喰仕上げとして腰板を高く張り、内部壁は板張りである。離れと内門は切妻造^{きりづまづくり}棧瓦葺で、北面に庇^{しっぽう}を設け居室として利用する。穀蔵は切妻造^{きりづまづくり}棧瓦葺の二階建て土蔵である。長屋門は潜戸付の両開きの重厚な板扉を門口とし、北側に二畳の部屋を設け、出格子窓をみせる。木小屋と塀は腰板壁上部漆喰壁で、小規模な棧瓦葺を連ねる。木小屋は街道に面した東を小規模な入母屋造^{いりもやづくり}とし、腰板張り漆喰壁として穀蔵、長屋門と一体に伝統的な街道景観を伝える。

旧上田家住宅は、向日市中央部の住宅地にある農家で、敷地は史跡長岡宮跡内に所在する。旧国鉄の新線計画に伴い、昭和 17 年（1942）に現在地へ移転しており、敷地内には移築された建物（主屋・内蔵・外蔵）と移転後に新築された建物（離れ・中門及び塀）が並び建つ。主屋は伝統的な農家の形式を基本とし、切妻造^{きりづまづくり}棧瓦葺で四周に下屋を廻して虫籠窓を設ける。離れは移転後に新築された二階建の建物で、主屋とともに伝統的な屋敷構えの中心部をなす。内蔵は主屋背面に接続する土蔵造の家財蔵で、街路に面して地域の景観要素となっ



写真 1-4-2-1 西国街道に面する中小路家住宅全景



図 1-4-2-2 普請願 弘化 5 年（1848）正月



写真 1-4-2-3 中小路家住宅 主屋座敷



写真 1-4-2-4 旧上田家住宅全景

ている。外蔵は土蔵造の米蔵及び木造平屋建の道具蔵等からなり、農家の作業に欠かせない付属建物である。中門及び塀は前庭を区画する塀と東面に開く門からなり、主屋の構えを格調高く整えている。

なお、向日神社においては、平成 27 年（2015）8 月に、重要文化財の本殿を取り囲む 13 棟の建物が、登録有形文化財に登録された。（建造物の詳細は第 2 章第 1 節参照）

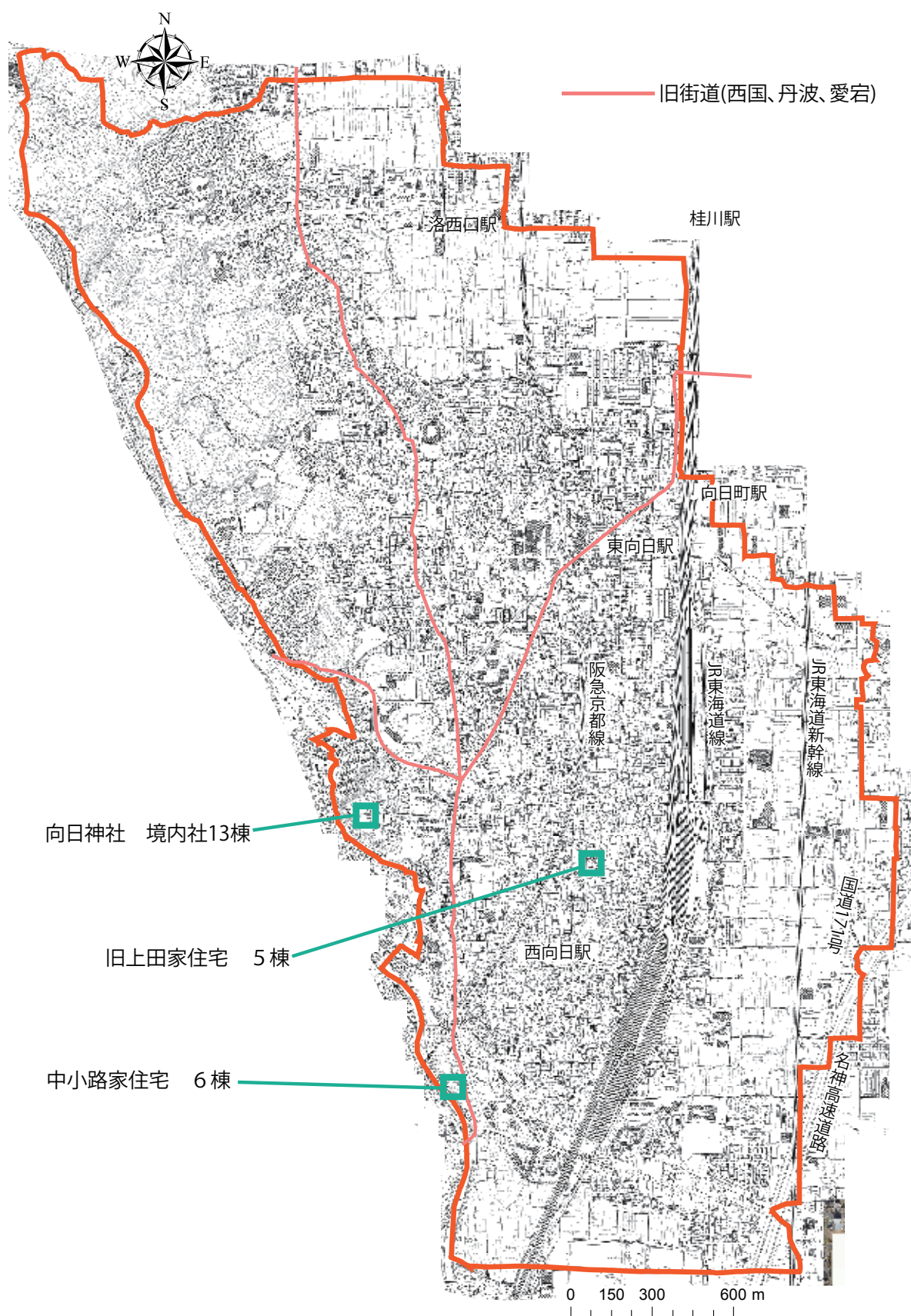


図 1-4-2-2 向日市の国登録有形文化財 位置図

3 府指定等文化財

指定文化財には建造物2件、美術工芸品の考古資料1件、無形民俗文化財1件が、登録文化財には建造物1件が、選定文化財に文化的景観1件がある。

①指定文化財

建造物は、鶏冠井町の「南真経寺開山堂、本堂」と寺戸町の「須田家住宅」がある。なお、南真経寺は、指定件数1件で、員数が2棟である。

南真経寺の創建は、徳治2年(1307)または延慶3年(1310)と伝わるが、この創建年時は日像上人による日蓮宗に改宗した時期で、これ以前は真言宗真言寺として古く開創されていた寺院である。

南真経寺開山堂は、境内のほぼ中央に南面して建つ。桁行五間、梁間五間、一重、入母屋造、本瓦葺で、正面に一間の向拝が付く。堂の四周を落縁を廻し、その木口に沿い軒支柱を配置する。堂内は、中央に三間四方の内陣があり、その両側と背面に各一間の脇陣と後陣が区分される。内陣の後方寄りに一間四方の内々陣を配置する。棟札により、寛永19年(1642)11月13日に上棟し、大工は建仁寺門前の坂上作左衛門尉吉貞であることが読み取れる。

南真経寺本堂は、開山堂の東で渡り廊下と結ばれ、西面して建つ。方一間、宝(方)形造、本瓦葺主屋の四周に一間通りの裳階が付属し、西正面に一間の向拝が付く。西正面と南北両側の三方に落縁を廻し、軒支柱を配置する。背面は、半間分東に突出し仏壇を設けるため、軒支柱はない。堂内は、一間四方の主屋の四隅に円柱を建て、各柱を虹梁で繋ぎ、天井桁と虹梁の間に小壁をつくり格天井に仕上げる。正徳4年(1714)の再建である。

須田家住宅は、古くは「松葉屋」の屋号を持ち、幕末まで醤油製造販売を家業とした。西国街道と愛宕道(物集女街道)、たんば道が分岐する地に愛宕道に東面して建つ町家形式の建築物である。主屋の北に離れ座敷と土蔵を配し、背(西)面に裏庭を広く取る。指定文化財は、主屋部分で、間口七間、梁間五間で、西面に下屋を継ぎ足す。主屋七間のうち、南四間と北三間に棟を分ける。外観はいずれも切妻造、棧瓦葺である。門口には中央に

大戸口を設け、その北側に格子の出窓、南側に格子窓を設ける。屋内は、大戸口を入ると土間庭で奥に台所を配する。この土間に沿い北側に座敷三室が並ぶ。台所から裏庭への背戸口の外上部に祈禱札が打ち付けてあり、延享元年(1744)には現在地に存在した



写真 1-4-3-1 南真経寺 開山堂



写真 1-4-3-2 南真経寺 本堂



写真 1-4-3-3 須田家住宅

ことがわかる。

考古資料の「物集女車塚古墳出土品」は、同古墳の墳丘及び石室内から出土した2,000点以上に及ぶ遺物が一括で平成30年3月23日に指定された。

物集女車塚古墳は、向日市物集女町に所在する6世紀中頃に築造された古式の幾内型横穴式石室を埋葬施設とする全長48mを測る前方後円墳である。

同古墳は、昭和59年度(1984)に京都府指定史跡に指定され、平成28年度(2016)には史跡乙訓古墳群を構成する古墳として国指定史跡となった。後円部の横穴式石室内には初葬時の組合せ式家形石棺を含め、6世紀中頃から末葉にかけ、3回から4回の埋葬が行われたと考えられる。

指定を受けた出土品は、墳丘及び石室並びに石棺内から出土したもので、装身具類、武器類、馬具類、土器類に大別される。

これらの出土品は、乙訓地域を代表する首長にふさわしい、金銅冠、環頭大刀、金銅装馬具の他、ガラス玉を中心とした装身具をはじめとする優品から構成される副葬品で、古墳時代後期を代表する出土品の組合せとして貴重である。

無形民俗文化財の「鶏冠井題目踊」は、全国にわずか3か所、洛北の松ヶ崎、修学院と本市鶏冠井町の京都近郊のみで見られる特殊な芸能の1つである。伝承によると、徳治2年(1307)に日像上人の京での布教により、いち早く帰依した上辻三郎四郎が上人の食事を準備した時、立ち上る炊煙が「南無妙法蓮華經」の題目を描き出し、歓喜した村人が野良着のまま踊り出したことが起源である。題目踊の名称は、法華經の教義と信仰を説く内容で、各音頭の小節の切れ目切れ目に「南無妙法蓮華經」の題目が繰り返し唱えられることに由来し、特徴の1つである。踊りは、「序ひらき」に始まり「地築踊」「扇千鳥」「笠の流し」「扇まぬけ」「居やみ踊」「三笠踊」「だんだん踊」「蓮華踊」「拍子踊」「扇踊」「志具見踊」「結躍終」までの全13曲からなる。

②登録文化財

登録文化財(建造物)は、鶏冠井町に「北真経寺本堂」がある。同寺の創建由緒は、南真経寺と同じで、元は1つの寺院であったが承応3年(1654)に分立し、僧日祥が檀林(日蓮宗僧侶の学校)を開いた。その後、明治時代になり檀家を持つ寺院となった。本堂は、檀林時代の講堂にあたり、桁行三間、梁間六間、寄棟造、本瓦葺で、境内中央北側に南面して建つ。南正面一間通りに広縁を配置する。室内は、中央に外陣を配し、内陣はその後方に内陣を寄せて本尊を安置する。背面側柱筋より後方に半間突出させ仏壇の両側に脇仏壇を付設する。



写真 1-4-3-4 物集女車塚古墳出土玉類



写真 1-4-3-5 鶏冠井題目踊



写真 1-4-3-6 北真経寺本堂

③選定文化財

選定文化財は、向日丘陵に文化的景観として「向日市 西ノ岡の竹の径・竹林景観」がある。本地域は、西国風致地区に指定されており、本市の特産品である良質のタケノコを生産する竹林が広がっており、整備された「竹林」と、道路沿いに設けた「竹穂垣」や「古墳垣」「物集女垣」など8種類ものオリジナルの竹垣が整然と連なる「竹の径」で構成された風致景観である。「竹の径」は国土交通省の「手づくり郷土賞」の受賞をはじめ、日本ウオーキング協会の「美しい日本の歩きたくなるみち500選」に選定されるなどしており、市民や観光客と景観資産を活かした交流をより深め地域振興に繋げている。また、この竹林の広がる丘陵上には、京都盆地でも最古級の全長98mを測る「寺戸大塚古墳」が所在する。この古墳を含め、農林水産業に係る景観として、物集女町長野、中海道、寺戸町芝山地内の全長1.8kmの散策道と道路沿いの竹林を合わせ9.79haが平成22年(2010)3月、京都府文化的景観に選定された。なお、京都府の景観資産として平成20年(2008)11月に登録された「西ノ岡・竹の径」と同じ規模と範囲である。



写真 1-4-3-7 選定地区の竹の径と竹林

【「竹の径」を構成する竹垣一覧】



「竹穂垣」



「古墳垣」



「かぐや垣」



「寺戸垣」



「物集女垣」



「来迎寺垣」



「深田垣」



「海道垣」

写真 1-4-3-8 「竹の径」を構成する竹垣

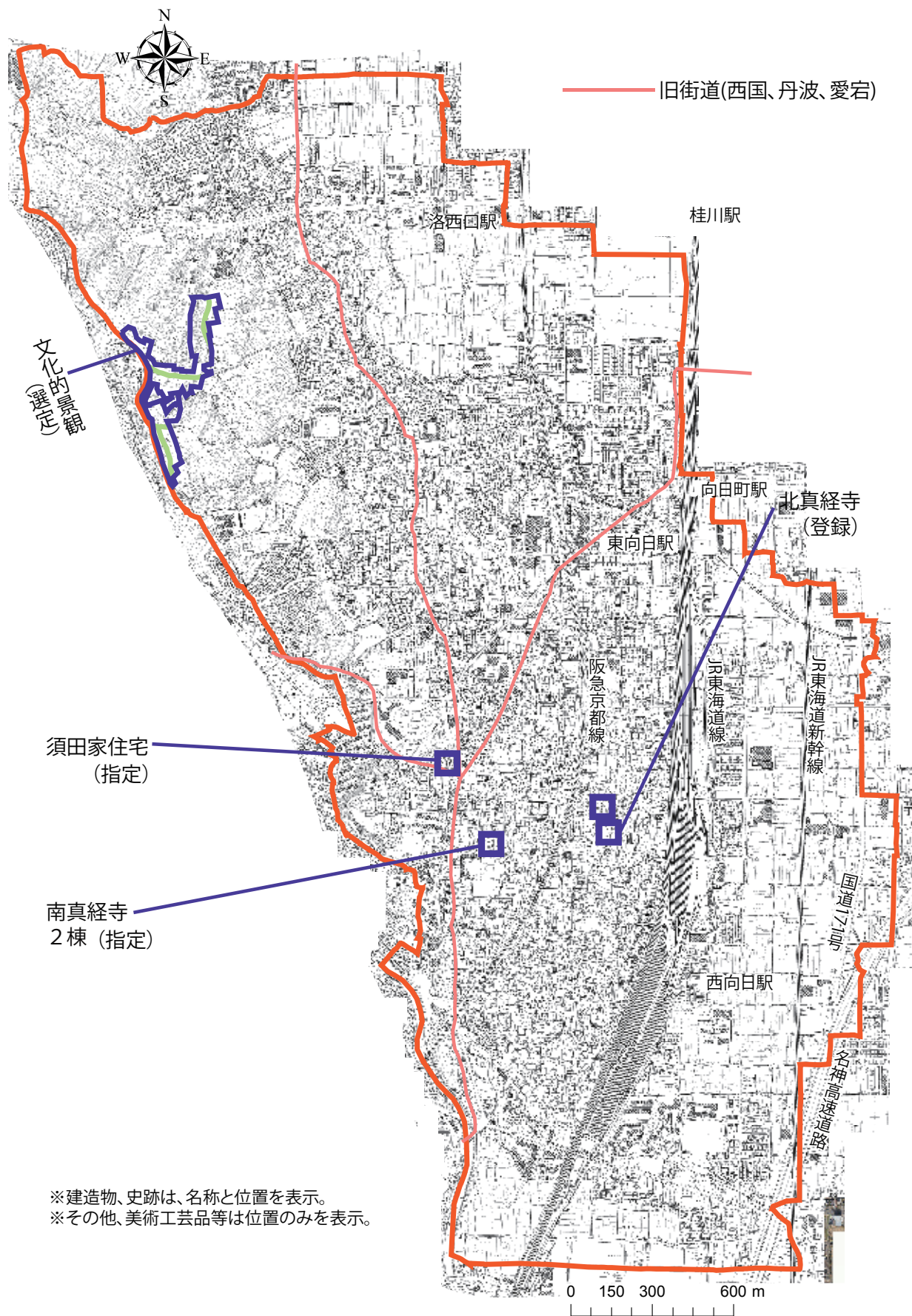


図 1-4-3-1 向日市の府指定等文化財 位置図

4 市指定文化財

市指定文化財は、美術工芸品 23 件、民俗文化財 2 件、史跡 2 件の 27 件である。

美術工芸品のうち、仏像は 7 件あり、平安時代後期が 2 件、鎌倉 3 件、室町 1 件、江戸 1 件である。

「木造阿弥陀如来坐像」(物集女来迎寺^{らいこうじ})は、定朝^{じょうちょう}様と称せられる平安時代後期彫刻の特徴を備えているが、その古様な表現は 11 世紀末にさかのぼる。

「木造薬師如来坐像」(物集女来迎寺)は、典型的な平安時代後期彫刻の特徴を備えた重要な作品である。

「木造阿弥陀如来立像」(持泉寺)は、浅い流麗な衣文を刻んだ姿に藤原彫刻の面影を残している。

「木造阿弥陀如来立像」(寺戸来迎寺)は、浄土教系寺院の本尊として数多く制作された像高 3 尺の阿弥陀如来像の一例である。

「木造地藏菩薩半跏像」(法道寺^{はんかぞう})は、平安時代後期の様式を留めながら、鎌倉時代の写実様式を加味した美しい地藏菩薩像で、13 世紀初期の制作である。

「木造阿弥陀如来立像」(南真経寺^{あんなみよう})は、安阿弥陀様と称せられる鎌倉時代の名仏師快慶の作風に属する仏像で、複雑な衣文の流れを巧みにまとめている。

「木造不空羂索観音坐像」(泉福寺^{ふくうけんさく})は、各部材を直線状に矧ぎ、室町時代の彫刻の特徴をよく表している。

石造物は、1 件で「石造種子両界曼荼羅板碑」^{まんだらいたび}は、凝灰岩製、削りぬき式家形石棺の身の側壁部分を除き、その底辺内側に中台八葉院で代表させた胎藏界曼荼羅、五智如来で代表させた金剛界曼荼羅の各種子曼荼羅を上下に陰刻し、両界曼荼羅板碑としたものである。

絵画は、2 件で、双方とも、江戸時代に慶昌院の開山曇開和尚(1768-1836)の肖像画である。

古文書は、5 件ある。

「明治 6 年鶏冠井村古地図」は、長岡京の条坊や乙訓郡の条里を復元するのに重要な地名が多く残っている。



写真 1-4-4-1 木造阿弥陀如来坐像(物集女来迎寺)



写真 1-4-4-2 木造薬師如来坐像(物集女来迎寺)



写真 1-4-4-3 木造阿弥陀如来立像(寺戸来迎寺)



写真 1-4-4-4 木造地藏菩薩半跏像(法道寺)



写真 1-4-4-5 木造不空羂索観音坐像(泉福寺)



写真 1-4-4-6 石造種子両界曼荼羅板碑



図 1-4-4-1 明治 6 年鶏冠井村古地図

「明治6年上植野村古地図」は、岡の部分には長岡京時代の大路小路の跡が残り、平地部では典型的な条里制の地割りがみられる。

「前田玄以^{さだめがき}定書向日前新町宛」は、豊臣政権の京都所司代であった民部卿法印前田玄以^{みんぶきやうほういん}が、向日前新町、つまり向日明神前の新町に宛てた定書。原文書は縦29.5cm、横45.8cmで軸装されている。近世都市建設期における領主政策を示す重要な資料である。

「寺戸村古地図」は、江戸時代の村絵図である。小字名だけでなく、田一枚ずつの領主、石高、作人が記されている。また領主の数は十を超えるが、その領主の田は決して1か所に集められることなく、互いに入り交じっていたことがよくわかる。

「鳴谷山山論裁許絵図、附『鳴谷鴨背両山絵図箱／寛文九年／己酉九月日／今里村、井内村、鶏冠井村、上植野村』墨書の絵図箱」は、江戸時代前期の寛文年間に乙訓郡小塩村内の鳴谷山（現京都市西京区小塩町付近）をめぐっておこった山論の際に、京都所司代、京都東西町奉行が下した裁定をうけて作成された裁許絵図の写である。全国的に山論が増加する寛文期にあつて、近世の村落境界や山野の利用権が確立する過程を知る貴重な資料である。



図1-4-4-2 鳴谷山山論裁許絵図、附「鳴谷鴨背両山絵図箱／寛文九年／己酉九月日／今里村、井内村、鶏冠井村、上植野村」墨書の絵図箱

歴史資料は1件で、「南真経寺・北真経寺、両寺霊宝一括」があり、日像の布教により鶏冠井の村人が日蓮宗に改宗した鎌倉時代の末頃から、信仰の中心となる真経寺に寺宝として伝えられたものと、江戸時代前期に寺宝を守り伝えるために形づくられたものからなる。寺宝を納める木箱とともに全体の姿が鶏冠井の集落の中で60年余の期間にわたり守られてきた貴重な文化財であることを示している。

考古資料は、7件ある。

「鶏冠井遺跡出土銅鐸鑄型」は、鶏冠井遺跡の川跡から出土した菱環紐式銅鐸鑄型で、弥生時代前期末～中期初頭の最古級のものである。

「十ヶ坪出土長岡京期銅鈴」は、球部のやや上部に全周する沈線を施し、前面にヤスリによる擦痕がある長岡京期の銅製の鈴である。

「長岡京大蔵跡出土鬼瓦」は、天平勝宝年間（8世紀中葉）のもので、平城宮で使用されていた瓦が遷都に伴い運び込まれた。

「森本遺跡出土弥生時代銅鏃」は、弥生時代の水路跡であった旧石田川の改修工事の際



写真1-4-4-7 南真経寺・北真経寺、両寺霊宝一括



写真1-4-4-8 十ヶ坪出土長岡京期銅鈴



写真1-4-4-9 長岡京大蔵跡出土鬼瓦

に出土した資料である。^{しま} 鋤は明瞭で、刃部の断面は菱形を呈する。

「森本遺跡出土弥生時代丸木弓」は、上記の銅鏃と同様に出土した。断面は円形で丹念に削りあげているが、加工の際の綾線を僅かに残している。

「長岡京跡出土金銅製鑢子」^{きす}は、厚さ0.15～0.19cmの銅板を八角形に折り曲げ^{ろうせつ}鑢接する。銅板を筒状にした後に2本1組の凸線を4条削り出し、凸線間には^{ね お}根尾の下になる面を除き毛彫りによる宝相華文と鑿による^{な な こ}魚々子を施した精巧な鍵。東大寺正倉院に類例がある鍵である。

「長岡京跡出土木簡」^{だじょうかんちゅうけ}は、太政官厨家の水路跡から出土した522点の木簡である。長岡京期の政治、都で暮らす生活実態がうかがえる貴重な文字資料である。

無形民俗文化財は、2件ある。

「鶏冠井シャナンボウ」は、毎年5月に行われる鶏冠井地区の子ども御輿の行事である。シャナンボウとは、幼名を牛若丸と称した義経が、ある時何者かに命を狙われ^{しやな}「遮那王」という法名を授けられ、身の危険を逃れたところからきた名称との話が伝わる。

「^{つきさかこう}築榊講常夜燈」は、阪急東向日駅前の西国街道と府道向日町停車場線の合流地点に所在する。寺戸町内にある伊勢講の1つである築榊講が、天保13年(1842)4月に建立したものである。総高においては市内最大の常夜燈である。この築榊講は、現在も活動しており、その象徴として民俗文化財に指定した。

記念物として史跡が2件ある。

「長岡京『東院』跡」は、京城において内裏正殿と同等規模を有する大規模な建物群が検出され、整備し公園として活用している。

「森本遺跡」は、昭和45年(1970)の学校建築により検出した弥生時代の中期と後期の水路跡である。学校グラウンド内に保存整備され、地域や学校において顕彰活動が続けられている。



写真 1-4-4-10 長岡京跡出土金銅製鑢子



写真 1-4-4-11 長岡京跡出土木簡

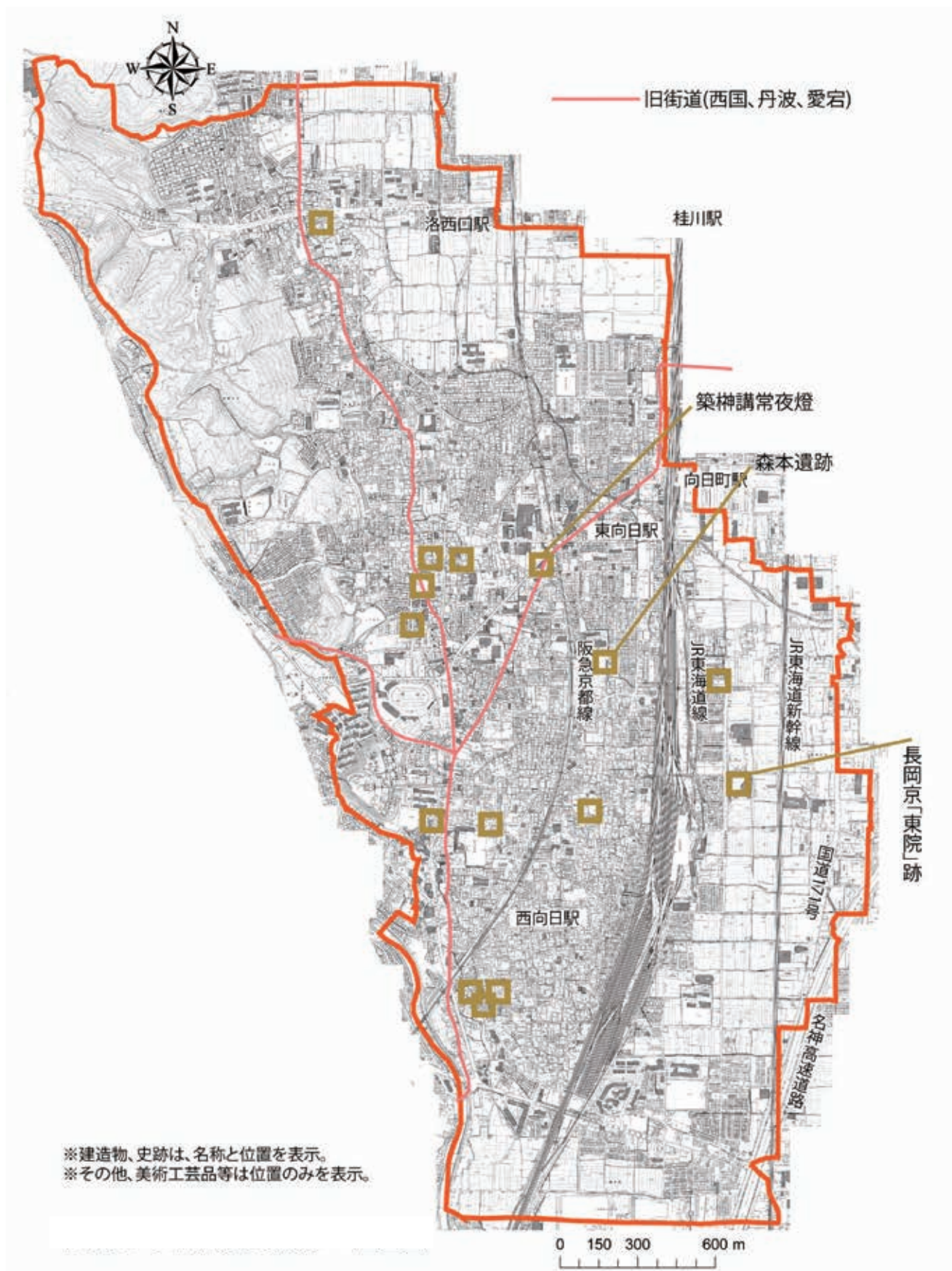


図 1-4-4-3 向日市の市指定文化財 位置図

5 指定等文化財以外の文化的資源

既往の調査で明らかになっている、歴史的建造物や美術工芸品、人々の活動などの文化的資源は以下のものがある。

〔建造物〕

西国街道、物集女街道（愛宕道）沿いには江戸時代の町家建築や農家住宅、石仏が所在する。昭和3年（1928）に開業の新京阪線西向日町駅の周囲には、田園都市構想に基づき区画された街区に当時の面影を残す郊外型住宅地が残っている。これらについても、平成11年度（1999）から「近代化遺産（建造物）総合調査」でリスト化を行い、平成17年度（2005）から「近代和風総合調査」などを実施し、位置、種別、外観確認などを実施した。



写真 1-4-5-1 農家住宅（物集女町）



写真 1-4-5-2 農家住宅（寺戸町）

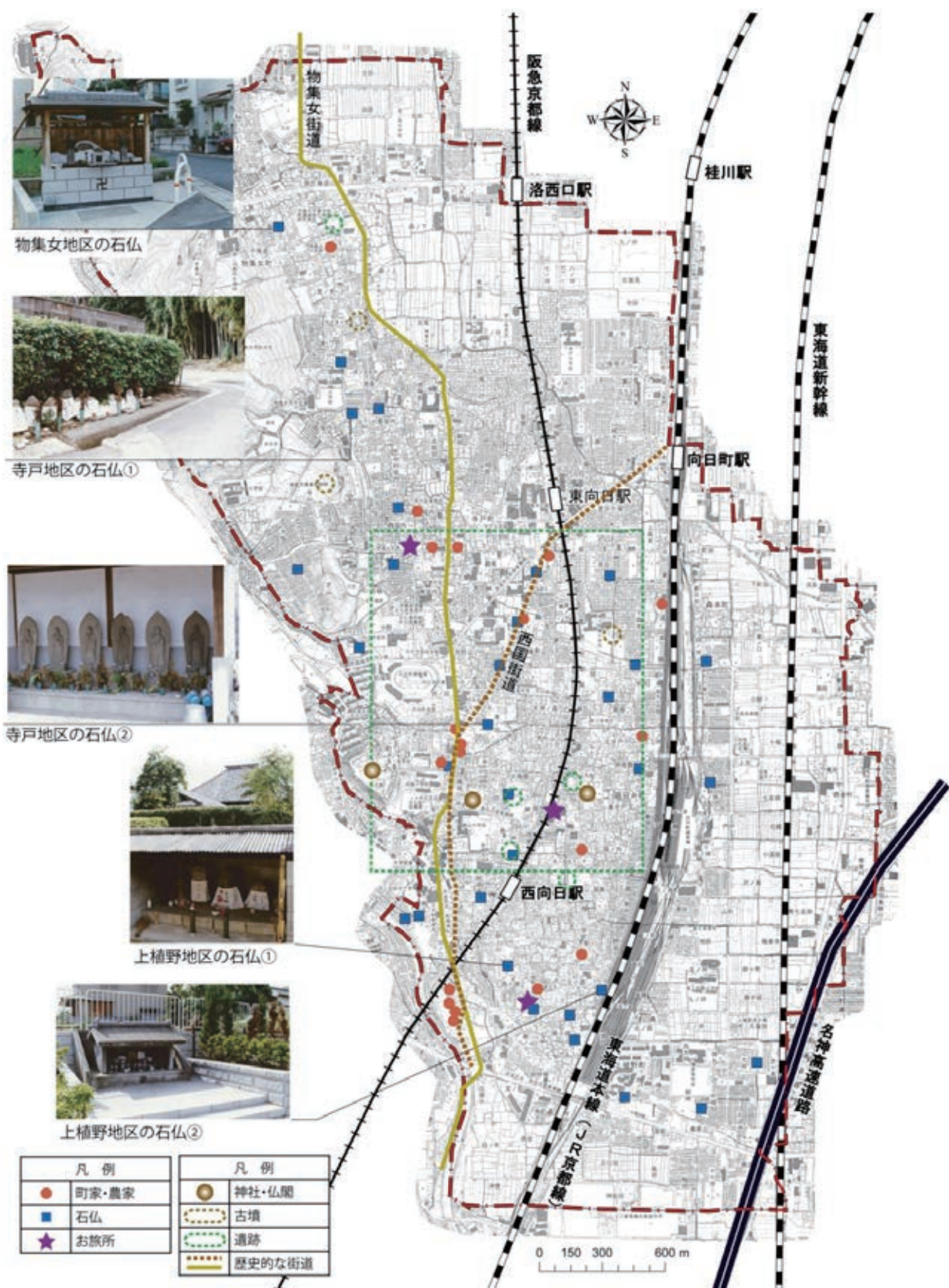


図 1-4-5-1 指定等文化財以外の文化的資源 位置図



写真 1-4-5-3 西国街道沿いの商家（寺戸町）



写真 1-4-5-4 西国街道沿いの町家風住宅（上植野町）

〔美術工芸品〕

在寺や旧家が所蔵する絵画や古文書について、向日市文化資料館を中心として調査を行い、台帳にするとともに、展示や普及活動などに活用している。



写真 1-4-5-5 南真経寺^{ねはん}涅槃図



写真 1-4-5-6 板壁絵「桜に^{きじ}雉図」（向日神社拝殿 内部北側）

考古資料については、昭和 29 年 (1954) 以来行っている埋蔵文化財発掘調査出土品について、整理、分類し、平成 30 年 (2018) 3 月 31 日現在、全 11,826 箱、71,721 個体をデータベース化している。



写真 1-4-5-7 考古資料 墨書人面土器



写真 1-4-5-8 考古資料 「東院」などの墨書土器